

合格突破講座

国語②

◇出題パターン 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本人は、道というものは自然に出来るものだと考えて来た。人が歩いて踏み固めた所が道だとした。「桃李^①もの言わず、下自ら蹊^{せき}をなす」というのを最も美であるとした。だから、道は、人間が進んで金をかけて作ったりするものではないとする考えが日本人の心に巣食っていた。その結果、日本の道路は、世界の文明国で最悪の道路だという評判をとった。

言葉についても、日本人は、自然に言葉は通じ合うものだと安心している。日本人は人と人との間に、絶対に渡ることの出来ない谷があるとは考えていない。我と汝^{なま}との間に超え得ない断絶があると思っていない。だから、言葉は本来通じるものだと思います。汝^{なま}（第二人称）に対してオレだのワレだのボクだのと呼んで、第一人称の代名詞を平気で転用するのも、我と汝との絶対的な対立を考えないからである。英語の世界ではyou（汝）の代りに「我」を使うことは全然考えられない。

契約とは利害相反する者の間で取りかわすものであるが、ヨーロッパでは神さえ人間と契約を結ぶ。旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。聖書は神と人間との契約書であろう。

□、およそ日本人は人間関係を契約ととらえる思想を持っていない。相手が自分に背くものだという思想が深い所に無い。だから、

3分

ら、言葉がたやすく通じらと思う。どっちみち通じるなら、言葉そのものはあまり重く見る要がない。表現の形式そのものを軽く扱う。この基本的観念が、国語教育の、基礎教育全体で占める割合のひどい低さを甘受させる。

ヨーロッパ人は、我と汝との間に超え難い断絶があると認識している。言葉は、その深い谷を、わずかに渡そうとする橋である。言葉はおのずからには通じない。通じようとして人間のかける橋である。それゆえ、かけ方によっては向う岸に着けないものだと考える。だから橋を注意深く構築する。そして子供には、橋の形式を、きびしく教え込む。

日本人は、根本においてこの考え方を持たないから、言葉や文字を学ぶ時間を減らして、それを他の学科に向けた方が利益だというような意見にも寛容で、それをたやすく通じた。しかし、言葉・文字の機能は、それほどなまやさしいものであるうか。

（大野晋著「日本語について」による。）

◇出題パターン 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本人は、道というものは自然に出来るものだと考えて来た。人が歩いて踏み固めた所が道だとした。「桃李^①もの言わず、下自ら蹊^②をなす」というのを最も美であるとした。だから、道は、人間が進んで金をかけて作ったりするものではないとする考えが日本人の心に巣食っていた。その結果、日本の道路は、世界の文明国で最悪の道路だという評判をとった。

言葉についても、日本人は、自然に言葉は通じ合うものだと安心している。日本人は人と人との間に、絶対に渡ることの出来ない谷があるとは考えていない。我と汝との間に超え得ない断絶があると思っていない。だから、言葉は本来通じるものだと思います。汝第二人称)に対してオレだのワレだのボクだのと呼んで、第一人称の代名詞を平気で転用するのも、我と汝との絶対的な対立を考えないからである。英語の世界ではyou(汝)の代りに「我」を使ったりすることは全然考えられない。

契約とは利害相反する者の間で取りかわすものであるが、ヨーロッパでは神さえ人間と契約を結ぶ。旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。聖書は神と人間との契約書であろう。

□、およそ日本人は人間関係を契約ととらえる思想を持っていない。相手が自分に背くものだという思想が深い所に無い。だから、

問1 本文中の空欄□にあてはまる言葉として最も適切なものを、

次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア また イ だから

ウ なぜなら エ ところが

()

ら、言葉がたやすく通じらなと思う。どっちみち通じるなら、言葉そのものはあまり重く見る要がない。表現の形式そのものを軽く扱う。この基本的観念が、国語教育の、基礎教育全体で占める割合のひどい低さを甘受させる。

ヨーロッパ人は、我と汝との間に超え難い断絶があると認識している。言葉は、その深い谷を、わずかに渡そうとする橋である。言葉はおのずからには通じない。通じようとして人間のかける橋である。それゆえ、かけ方によっては向う岸に着けないものだと考える。だから橋を注意深く構築する。そして子供には、橋の形式を、きびしく教え込む。

日本人は、根本においてこの考え方を持たないから、言葉や文字を学ぶ時間を減らして、それを他の学科に向けた方が利益だというような意見にも寛容で、それをたやすく通じた。しかし、言葉・文字の機能は、それほどなまやさしいものであるか。

(大野晋著「日本語について」による。)

◇出題パターン 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本人は、道というものは自然に出来るものだと考えて来た。人が歩いて踏み固めた所が道だとした。「桃李^①もの言わず、下自ら蹊^②をなす」というのを最も美であるとした。だから、道は、人間が進んで金をかけて作ったりするものではないとする考えが日本人の心に巣食っていた。その結果、日本の道路は、世界の文明国で最悪の道路だという評判をとった。

言葉についても、日本人は、自然に言葉は通じ合うものだと安心している。日本人は人と人との間に、絶対に渡ることの出来ない谷があるとは考えていない。我と汝との間に超え得ない断絶があると思っていない。だから、言葉は本来通じるものだと思います。汝第二人称)に対してオレだのワレだのボクだのと呼んで、第一人称の代名詞を平気で転用するのも、我と汝との絶対的な対立を考えないからである。英語の世界ではyou(汝)の代りに「我」を使ったりすることは全然考えられない。

契約とは利害相反する者の間で取りかわすものであるが、ヨーロッパでは神さえ人間と契約を結ぶ。旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。聖書は神と人間との契約書であろう。

□、およそ日本人は人間関係を契約ととらえる思想を持っていなかった。相手が自分に背くものだという思想が深い所に無い。だから

問1 本文中の空欄□にあてはまる言葉として最も適切なものを、

次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア また イ だから

ウ なぜなら エ ところが

()

ヨーロッパでは神さえ人間と契約を結ぶ。
旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。
聖書は神と人間との契約書であろう。

およそ、日本人は人間関係を契約ととらえる
思想を持っていなかった。

ら、言葉がたやすく通じると思う。どっちみち通じるなら、言葉そのものはあまり重く見る要がない。表現の形式そのものを軽く扱う。この基本的観念が、国語教育の、基礎教育全体で占める割合のひどい低さを甘受させる。

ヨーロッパ人は、我と汝との間に超え難い断絶があると認識している。言葉は、その深い谷を、わずかに渡そうとする橋である。言葉はおのずからには通じない。通じようとして人間のかける橋である。それゆえ、かけ方によっては向う岸に着けないものだと考える。だから橋を注意深く構築する。そして子供には、橋の形式を、きびしく教え込む。

日本人は、根本においてこの考え方を持たないから、言葉や文字を学ぶ時間を減らして、それを他の学科に向けた方が利益だというような意見にも寛容で、それをたやすく通じた。しかし、言葉・文字の機能は、それほどなまやさしいものであるうか。

(大野晋著「日本語について」による。)

◇出題パターン 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本人は、道というものは自然に出来るものだと考えて来た。人が歩いて踏み固めた所が道だとした。「桃李^①もの言わず、下自ら蹊^②をなす」というのを最も美であるとした。だから、道は、人間が進んで金をかけて作ったりするものではないとする考えが日本人の心に巣食っていた。その結果、日本の道路は、世界の文明国で最悪の道路だという評判をとった。

言葉についても、日本人は、自然に言葉は通じ合うものだと安心している。日本人は人と人との間に、絶対に渡ることの出来ない谷があるとは考えていない。我と汝との間に超え得ない断絶があると思っていない。だから、言葉は本来通じるものだと思います。汝第二人称)に対してオレだのワレだのボクだのと呼んで、第一人称の代名詞を平気で転用するのも、我と汝との絶対的な対立を考えないからである。英語の世界ではyou(汝)の代りに「我」を使ったりすることは全然考えられない。

契約とは利害相反する者の間で取りかわすものであるが、ヨーロッパでは神さえ人間と契約を結ぶ。旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。聖書は神と人間との契約書であろう。

□、およそ日本人は人間関係を契約ととらえる思想を持っていなかった。相手が自分に背くものだという思想が深い所に無い。だから

問1 本文中の空欄□にあてはまる言葉として最も適切なものを、

次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア また イ だから

ウ なぜなら エ ところが

()

ら、言葉がたやすく通じらなと思う。どっちみち通じるなら、言葉そのものはあまり重く見る要がない。表現の形式そのものを軽く扱う。この基本的観念が、国語教育の、基礎教育全体で占める割合のひどい低さを甘受させる。

ヨーロッパ人は、我と汝との間に超え難い断絶があると認識している。言葉は、その深い谷を、わずかに渡そうとする橋である。言葉はおのずからには通じない。通じようとして人間のかける橋である。それゆえ、かけ方によっては向う岸に着けないものだと考える。だから橋を注意深く構築する。そして子供には、橋の形式を、きびしく教え込む。

日本人は、根本においてこの考え方を持たないから、言葉や文字を学ぶ時間を減らして、それを他の学科に向けた方が利益だというような意見にも寛容で、それをたやすく通じた。しかし、言葉・文字の機能は、それほどなまやさしいものであるうか。

(大野晋著「日本語について」による。)

ヨーロッパでは神さえ人間と契約を結ぶ。
旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。
聖書は神と人間との契約書であろう。

(主張)
(具体的根拠)

およそ、日本人は人間関係を契約ととらえる
思想を持っていなかった。

◇出題パターン 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本人は、道というものは自然に出来るものだと考えて来た。人が歩いて踏み固めた所が道だとした。「桃李^①もの言わず、下自ら蹊^②をなす」というのを最も美であるとした。だから、道は、人間が進んで金をかけて作ったりするものではないとする考えが日本人の心に巣食っていた。その結果、日本の道路は、世界の文明国で最悪の道路だという評判をとった。

言葉についても、日本人は、自然に言葉は通じ合うものだと安心している。日本人は人と人との間に、絶対に渡ることの出来ない谷があるとは考えていない。我と汝との間に超え得ない断絶があると思っていない。だから、言葉は本来通じるものだと思います。汝第二人称)に対してオレだのワレだのボクだのと呼んで、第一人称の代名詞を平気で転用するのも、我と汝との絶対的な対立を考えないからである。英語の世界ではyou(汝)の代りに「我」を使ったりすることは全然考えられない。

契約とは利害相反する者の間で取りかわすものであるが、ヨーロッパでは神さえ人間と契約を結ぶ。旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。聖書は神と人間との契約書であろう。

□、およそ日本人は人間関係を契約ととらえる思想を持っていなかった。相手が自分に背くものだという思想が深い所に無い。だから

問1 本文中の空欄□にあてはまる言葉として最も適切なものを、

次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア また イ だから

ウ なぜなら エ ところが

〔 〕

ら、言葉がたやすく通じらぬと思う。どっちみち通じるなら、言葉そのものはあまり重く見る要がない。表現の形式そのものを軽く扱う。この基本的観念が、国語教育の、基礎教育全体で占める割合のひどい低さを甘受させる。

ヨーロッパ人は、我と汝との間に超え難い断絶があると認識している。言葉は、その深い谷を、わずかに渡そうとする橋である。言葉はおのずからには通じない。通じようとして人間のかける橋である。それゆえ、かけ方によっては向う岸に着けないものだと考える。だから橋を注意深く構築する。そして子供には、橋の形式を、きびしく教え込む。

日本人は、根本においてこの考え方を持たないから、言葉や文字を学ぶ時間を減らして、それを他の学科に向けた方が利益だというような意見にも寛容で、それをたやすく通じた。しかし、言葉・文字の機能は、それほどなまやさしいものであるうか。

(大野晋著「日本語について」による。)

ヨーロッパでは神さえ人間と契約を結ぶ。
旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。
聖書は神と人間との契約書であろう。

(主張)
(具体的根拠)

およそ、日本人は人間関係を契約ととらえる思想を持っていなかった。

◇出題パターン 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本人は、道というものは自然に出来るものだと考えて来た。人が歩いて踏み固めた所が道だとした。「桃李^①もの言わず、下自ら蹊^②をなす」というのを最も美であるとした。だから、道は、人間が進んで金をかけて作ったりするものではないとする考えが日本人の心に巣食っていた。その結果、日本の道路は、世界の文明国で最悪の道路だという評判をとった。

言葉についても、日本人は、自然に言葉は通じ合うものだと安心している。日本人は人と人との間に、絶対に渡ることの出来ない谷があるとは考えていない。我と汝との間に超え得ない断絶があると思っていない。だから、言葉は本来通じるものだと思います。汝第二人称)に対してオレだのワレだのボクだのと呼んで、第一人称の代名詞を平気で転用するのも、我と汝との絶対的な対立を考えないからである。英語の世界ではyou(汝)の代りに「我」を使ったりすることは全然考えられない。

契約とは利害相反する者の間で取りかわすものであるが、ヨーロッパでは神さえ人間と契約を結ぶ。旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。聖書は神と人間との契約書であろう。

□、およそ日本人は人間関係を契約ととらえる思想を持っていなかった。相手が自分に背くものだという思想が深い所に無い。だから

問1 本文中の空欄□にあてはまる言葉として最も適切なものを、

次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア また イ だから

ウ なぜなら エ ところが

〔 〕

ら、言葉がたやすく通じらなと思う。どっちみち通じるなら、言葉そのものはあまり重く見る要がない。表現の形式そのものを軽く扱う。この基本的観念が、国語教育の、基礎教育全体で占める割合のひどい低さを甘受させる。

ヨーロッパ人は、我と汝との間に超え難い断絶があると認識している。言葉は、その深い谷を、わずかに渡そうとする橋である。言葉はおのずからには通じない。通じようとして人間のかける橋である。それゆえ、かけ方によっては向う岸に着けないものだと考える。だから橋を注意深く構築する。そして子供には、橋の形式を、きびしく教え込む。

日本人は、根本においてこの考え方を持たないから、言葉や文字を学ぶ時間を減らして、それを他の学科に向けた方が利益だというような意見にも寛容で、それをたやすく通じた。しかし、言葉・文字の機能は、それほどなまやさしいものであるうか。

(大野晋著「日本語について」による。)

ヨーロッパでは神さえ人間と契約を結ぶ。

(主張)

(具体的根拠)

旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。

(具体的根拠)

(また) 似た内容をつけたす。

およそ、日本人は人間関係を契約ととらえる思想を持っていなかった。

◇出題パターン 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本人は、道というものは自然に出来るものだと考えて来た。人が歩いて踏み固めた所が道だとした。「桃李^①もの言わず、下自ら蹊^②をなす」というのを最も美であるとした。だから、道は、人間が進んで金をかけて作ったりするものではないとする考えが日本人の心に巣食っていた。その結果、日本の道路は、世界の文明国で最悪の道路だという評判をとった。

言葉についても、日本人は、自然に言葉は通じ合うものだと安心している。日本人は人と人との間に、絶対に渡ることの出来ない谷があるとは考えていない。我と汝との間に超え得ない断絶があると思っていない。だから、言葉は本来通じるものだと思います。汝^③第二人称)に対してオレだのワレだのボクだのと呼んで、第一人称の代名詞を平気で転用するのも、我と汝との絶対的な対立を考えないからである。英語の世界ではyou(汝)の代りに「我」を使ったりすることは全然考えられない。

契約とは利害相反する者の間で取りかわすものであるが、ヨーロッパでは神さえ人間と契約を結ぶ。旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。聖書は神と人間との契約書であろう。

□、およそ日本人は人間関係を契約ととらえる思想を持っていない。相手が自分に背くものだという思想が深い所に無い。だから

問1 本文中の空欄□にあてはまる言葉として最も適切なものを、

次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア また イ だから

ウ なぜなら エ ところが

〔 〕

ら、言葉がたやすく通じらなと思う。どっちみち通じるなら、言葉そのものはあまり重く見る要がない。表現の形式そのものを軽く扱う。この基本的観念が、国語教育の、基礎教育全体で占める割合のひどい低さを甘受させる。

ヨーロッパ人は、我と汝との間に超え難い断絶があると認識している。言葉は、その深い谷を、わずかに渡そうとする橋である。言葉はおのずからには通じない。通じようとして人間のかける橋である。それゆえ、かけ方によっては向う岸に着けないものだと考える。だから橋を注意深く構築する。そして子供には、橋の形式を、きびしく教え込む。

日本人は、根本においてこの考え方を持たないから、言葉や文字を学ぶ時間を減らして、それを他の学科に向けた方が利益だというような意見にも寛容で、それをたやすく通じた。しかし、言葉・文字の機能は、それほどなまやさしいものであるうか。

(大野晋著「日本語について」による。)

ヨーロッパでは神さえ人間と契約を結ぶ。
旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。
聖書は神と人間との契約書であろう。

(主張)
(具体的根拠)

(だから) (前に理由・原因) (後に結果)

およそ、日本人は人間関係を契約ととらえる思想を持っていなかった。

◇出題パターン 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本人は、道というものは自然に出来るものだと考えて来た。人が歩いて踏み固めた所が道だとした。「桃李^①もの言わず、下自ら蹊^②をなす」というのを最も美であるとした。だから、道は、人間が進んで金をかけて作ったりするものではないとする考えが日本人の心に巣食っていた。その結果、日本の道路は、世界の文明国で最悪の道路だという評判をとった。

言葉についても、日本人は、自然に言葉は通じ合うものだと安心している。日本人は人と人との間に、絶対に渡ることの出来ない谷があるとは考えていない。我と汝との間に超え得ない断絶があると思っていない。だから、言葉は本来通じるものだと思います。汝^③第二人称)に対してオレだのワレだのボクだのと呼んで、第一人称の代名詞を平気で転用するのも、我と汝との絶対的な対立を考えないからである。英語の世界ではyou(汝)の代りに「我」を使ったりすることは全然考えられない。

契約とは利害相反する者の間で取りかわすものであるが、ヨーロッパでは神さえ人間と契約を結ぶ。旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。聖書は神と人間との契約書であろう。

□、およそ日本人は人間関係を契約ととらえる思想を持っていなかった。相手が自分に背くものだという思想が深い所に無い。だから

問1 本文中の空欄□にあてはまる言葉として最も適切なものを、

次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア また イ だから

ウ なぜなら エ ところが

〔 〕

ら、言葉がたやすく通じらなと思う。どっちみち通じるなら、言葉そのものはあまり重く見る要がない。表現の形式そのものを軽く扱う。この基本的観念が、国語教育の、基礎教育全体で占める割合のひどい低さを甘受させる。

ヨーロッパ人は、我と汝との間に超え難い断絶があると認識している。言葉は、その深い谷を、わずかに渡そうとする橋である。言葉はおのずからには通じない。通じようとして人間のかける橋である。それゆえ、かけ方によっては向う岸に着けないものだと考える。だから橋を注意深く構築する。そして子供には、橋の形式を、きびしく教え込む。

日本人は、根本においてこの考え方を持たないから、言葉や文字を学ぶ時間を減らして、それを他の学科に向けた方が利益だというような意見にも寛容で、それをたやすく通じた。しかし、言葉・文字の機能は、それほどなまやさしいものであるうか。

(大野晋著「日本語について」による。)

ヨーロッパでは神さえ人間と契約を結ぶ。
旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。
聖書は神と人間との契約書であろう。

(主張)

(具体的根拠)

(なぜなら) 前に結果 後に理由・原因

およそ、日本人は人間関係を契約ととらえる思想を持っていなかったからだ。

◇出題パターン 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本人は、道というものは自然に出来るものだと考えて来た。人が歩いて踏み固めた所が道だとした。「桃李^①もの言わず、下自ら蹊^②をなす」というのを最も美であるとした。だから、道は、人間が進んで金をかけて作ったりするものではないとする考えが日本人の心に巣食っていた。その結果、日本の道路は、世界の文明国で最悪の道路だという評判をとった。

言葉についても、日本人は、自然に言葉は通じ合うものだと思われている。日本人は人と人との間に、絶対に渡ることの出来ない谷があるとは考えていない。我と汝との間に超え得ない断絶があると思っていない。だから、言葉は本来通じるものだと思います。汝^③第二人称)に対してオレだのワレだのボクだのと呼んで、第一人称の代名詞を平気で転用するのも、我と汝との絶対的な対立を考えないからである。英語の世界ではyou(汝)の代りに「我」を使ったりすることは全然考えられない。

契約とは利害相反する者の間で取りかわすものであるが、ヨーロッパでは神さえ人間と契約を結ぶ。旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。聖書は神と人間との契約書であろう。

□、およそ日本人は人間関係を契約ととらえる思想を持っていなかった。相手が自分に背くものだという思想が深い所に無い。だから

問1 本文中の空欄□にあてはまる言葉として最も適切なものを、

次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア また イ だから

ウ なぜなら **エ** ところが

〔 〕

ヨーロッパでは神さえ人間と契約を結ぶ。

(主張)

旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。

(具体的根拠)

聖書は神と人間との契約書である。

(ところが) **前後で対照的な内容になる**

およそ、日本人は人間関係を契約ととらえる思想を持っていなかった**からだ**。

対照的＝二つ以上の事物を比較したときに、その違いがはっきりと際立っている状態

ら、言葉がたやすく通じらると思う。どっちみち通じるなら、言葉そのものはあまり重く見る要がない。表現の形式そのものを軽く扱う。この基本的観念が、国語教育の、基礎教育全体で占める割合のひどい低さを甘受させる。

ヨーロッパ人は、我と汝との間に超え難い断絶があると認識している。言葉は、その深い谷を、わずかに渡そうとする橋である。言葉はおのずからには通じない。通じようとして人間のかける橋である。それゆえ、かけ方によっては向う岸に着けないものだと考える。だから橋を注意深く構築する。そして子供には、橋の形式を、きびしく教え込む。

日本人は、根本においてこの考え方を持たないから、言葉や文字を学ぶ時間を減らして、それを他の学科に向けた方が利益だというような意見にも寛容で、それをたやすく通じた。しかし、言葉・文字の機能は、それほどなまやさしいものであるうか。

(大野晋著「日本語について」による。)

◇出題パターン 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本人は、道というものは自然に出来るものだと考えて来た。人が歩いて踏み固めた所が道だとした。「桃李^①もの言わず、下自ら蹊^{せき}をなす」というのを最も美であるとした。だから、道は、人間が進んで金をかけて作ったりするものではないとする考えが日本人の心に巣食っていた。その結果、日本の道路は、世界の文明国で最悪の道路だという評判をとった。

言葉についても、日本人は、自然に言葉は通じ合うものだと安心している。日本人は人と人との間に、絶対に渡ることの出来ない谷があるとは考えていない。我と汝との間に超え得ない断絶があると思っていない。だから、言葉は本来通じるものだと思います。汝^な第二人称)に対してオレだのワレだのボクだのと呼んで、第一人称の代名詞を平気で転用するのも、我と汝との絶対的な対立を考えないからである。英語の世界ではyou(汝)の代りに「我」を使ったりすることは全然考えられない。

契約とは利害相反する者の間で取りかわすものであるが、ヨーロッパでは神さえ人間と契約を結ぶ。旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。聖書は神と人間との契約書であろう。

□、およそ日本人は人間関係を契約ととらえる思想を持っていなかった。相手が自分に背くものだという思想が深い所に無い。だから、

接続詞挿入問題
空欄に接続詞を入れて読んでよう

ヨーロッパでは神さえ人間と契約を結ぶ。
旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。
聖書は神と人間との契約書であろう。

(主張)
(具体的根拠)

(ところが) 前後で対照的な内容になる

およそ、日本人は人間関係を契約ととらえる思想を持っていなかったからだ。

対照的＝二つ以上の事物を比較したときに、その違いがはっきりと際立っている状態

ら、言葉がたやすく通じらなと思う。どっちみち通じるなら、言葉そのものはあまり重く見る要がない。表現の形式そのものを軽く扱う。この基本的観念が、国語教育の、基礎教育全体で占める割合のひどい低さを甘受させる。

ヨーロッパ人は、我と汝との間に超え難い断絶があると認識している。言葉は、その深い谷を、わずかに渡そうとする橋である。言葉はおのずからには通じない。通じようとして人間のかける橋である。それゆえ、かけ方によっては向う岸に着けないものだと考える。だから橋を注意深く構築する。そして子供には、橋の形式を、きびしく教え込む。

日本人は、根本においてこの考え方を持たないから、言葉や文字を学ぶ時間を減らして、それを他の学科に向けた方が利益だというような意見にも寛容で、それをたやすく通じた。しかし、言葉・文字の機能は、それほどなまやさしいものであるうか。

(大野晋著「日本語について」による。)

◇出題パターン 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本人は、道というものは自然に出来るものだと考えて来た。人が歩いて踏み固めた所が道だとした。「桃李^①もの言わず、下自ら蹊^②をなす」というのを最も美であるとした。だから、道は、人間が進んで金をかけて作ったりするものではないとする考えが日本人の心に集食^③っていた。その結果、日本の道路は、世界の文明国で最悪の道路だという評判をとった。

言葉についても、日本人は、自然に言葉は通じ合うものだと安心している。日本人は人と人との間に、絶対に渡ることの出来ない谷があるとは考えていない。我と汝との間に超え得ない断絶があると思っていない。だから、言葉は本来通じるものだと思います。汝^④第二人称)に対してオレだのワレだのボクだのと呼んで、第一人称の代名詞を平気で転用するのも、我と汝との絶対的な対立を考えないからである。英語の世界ではyou(汝)の代りに「我」を使ったりすることは全然考えられない。

契約とは利害相反する者の間で取りかわすものであるが、ヨーロッパでは神さえ人間と契約を結ぶ。旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。聖書は神と人間との契約書であろう。

□、およそ日本人は人間関係を契約ととらえる思想を持っていなかった。相手が自分に背くものだという思想が深い所に無い。だから

問2 桃李もの言わず、下自ら蹊をなす とありますが、この言葉の意味として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 桃や李のおいしさは、何も言わなくてもだれもが知っている。
 イ 桃や李は、熟して自然に落ちるまで待つて手に入れるものだ。
 ウ 桃や李の花や実を求めて人が集まるので、自然に道が出来る。
 エ 桃や李は、道のある所に実がなるので、人々に重宝される。

ら、言葉がたやすく通じらと思う。どっちみち通じるなら、言葉そのものはあまり重く見る要がない。表現の形式そのものを軽く扱う。この基本的観念が、国語教育の、基礎教育全体で占める割合のひどい低さを甘受させる。

ヨーロッパ人は、我と汝との間に超え難い断絶があると認識している。言葉は、その深い谷を、わずかに渡そうとする橋である。言葉はおのずからには通じない。通じようとして人間のかける橋である。それゆえ、かけ方によっては向う岸に着けないものだと考える。だから橋を注意深く構築する。そして子供には、橋の形式を、きびしく教え込む。

日本人は、根本においてこの考え方を持たないから、言葉や文字を学ぶ時間を減らして、それを他の学科に向けた方が利益だというような意見にも寛容で、それをたやすく通じた。しかし、言葉・文字の機能は、それほどなまやさしいものであるうか。

(大野晋著「日本語について」による。)

問2

◇出題パターン 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本人は、道というものは自然に出来るものだと考えて来た。人が歩いて踏み固めた所が道だとした。^①「桃李^{とうり}もの言わず、下自ら蹊^{せき}をなす」というのを最も美であるとした。だから道は人間が進んで金をかけて作った^②りするものではないとする考えが日本人の心に巣食^{すく}っていた。その結果、日本の道路は、世界の文明国で最悪の道路だという評判をとった。

言葉についても、日本人は、自然に言葉は通じ合うものだと安心している。日本人は人と人との間に、絶対に渡ることの出来ない谷があるとは考えていない。我と汝との間に超え得ない断絶があると思っていない。だから、言葉は本来通じるものだと思いますがちである。汝^な第二人称)に対してオレだのワレだのボクだのと呼んで、第一人称の代名詞を平気で転用するのも、我と汝との絶対的な対立を考えないからである。英語の世界では「汝」(汝)の代りに「我」を使ったりすることは全然考えられない。

契約とは利害相反する者の間で取りかわすものであるが、ヨーロッパでは神さえ人間と契約を結ぶ。旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。聖書は神と人間との契約書であろう。

□、およそ日本人は人間関係を契約ととらえる思想を持っていなかった。相手が自分に背くものだという思想が深い所に無い。だから

問2 桃李^①もの言わず、下自ら蹊^{せき}をなす とありますが、この言葉の

意味として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 桃や李^しのおいしさは、何も言わなくてもだれもが知っている。
 イ 桃や李は、熟して自然に落ちるまで待つて手に入れるものだ。
 ウ 桃や李の花や実を求めて人が集まるので、自然に道が出来る。
 エ 桃や李は、道のある所に実がなるので、人々に重宝される。

問2

ら、言葉がたやすく通じらと思う。どっちみち通じるなら、言葉そのものはあまり重く見る要がない。表現の形式そのものを軽く扱う。この基本的観念が、国語教育の、基礎教育全体で占める割合のひどい低さを甘受させる。

ヨーロッパ人は、我と汝との間に超え難い断絶があると認識している。言葉は、その深い谷を、わずかに渡そうとする橋である。言葉はおのずからには通じない。通じようとして人間のかける橋である。それゆえ、かけ方によっては向う岸に着けないものだと考える。だから橋を注意深く構築する。そして子供には、橋の形式を、きびしく教え込む。

日本人は、根本においてこの考え方を持たないから、言葉や文字を学ぶ時間を減らして、それを他の学科に向けた方が利益だというような意見にも寛容で、それをたやすく通じた。しかし、言葉・文字の機能は、それほどなまやさしいものであるうか。

(大野晋著「日本語について」による。)

◇出題パターン 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本人は、道というものは自然に出来るものだと考えて来た。人が歩いて踏み固めた所が道だとした。①「桃李^{とうり}もの言わず、下自ら蹊^{せき}をなす」というのを最も美であるとした。だから道は 人間が進んで金をかけて作ったりするものではないとする考えが日本人の心に巢食^{すく}っていた。その結果、日本の道路は、世界の文明国で最悪の道路だという評判をとった。

言葉についても、日本人は、自然に言葉は通じ合うものだと安心している。日本人は人と人との間に、絶対に渡ることの出来ない谷があるとは考えていない。我と汝との間に超え得ない断絶があると思っていない。だから、言葉は本来通じるものだと思います。汝^な第二人称)に対してオレだのワレだのボクだのと呼んで、第一人称の代名詞を平気で転用するのも、我と汝との絶対的な対立を考えないからである。英語の世界ではyou(汝)の代りに「我」を使ったりすることは全然考えられない。

契約とは利害相反する者の間で取りかわすものであるが、ヨーロッパでは神さへ人間と契約を結ぶ。旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。聖書は神と人間との契約書であろう。

□、およそ日本人は人間関係を契約ととらえる思想を持っている。相手が自分に背くものだという思想が深い所に無い。だから

問2 桃李^{とうり}もの言わず、下自ら蹊^{せき}をなす」とありますが、この言葉の意味として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 桃や李^{とうり}のおいしさは、何も言わなくてもだれもが知っている。
- イ 桃や李は、熟して自然に落ちるまで待つて手に入れるものだ。
- ウ 桃や李の花や実を求めて人が集まるので、自然に道が出来る。
- エ 桃や李は、道のある所に実がなるので、人々に重宝される。

問2

「桃李^{とうり}ものを言わず、下自ら蹊^{せき}をなす」というのを最も美であるとしたから、道は、人間が進んで金をかけてつけて作ったりするものではないとする考えが日本人の心に巢食^{すく}った結果、日本の道路は、世界の文明国で最悪の道路だという評判をとった」

ら、言葉がたやすく通じらると思う。どっちみち通じるなら、言葉そのものはあまり重く見る要がない。表現の形式そのものを軽く扱う。この基本的観念が、国語教育の、基礎教育全体で占める割合のひどい低さを甘受させる。

ヨーロッパ人は、我と汝との間に超え難い断絶があると認識している。言葉は、その深い谷を、わずかに渡そうとする橋である。言葉はおのずからには通じない。通じようとして人間のかける橋である。それゆえ、かけ方によっては向う岸に着けないものだと考える。だから橋を注意深く構築する。そして子供には、橋の形式を、きびしく教え込む。

日本人は、根本においてこの考え方を持たないから、言葉や文字を学ぶ時間を減らして、それを他の学科に向けた方が利益だというような意見にも寛容で、それをたやすく通じた。しかし、言葉・文字の機能は、それほどなまやさしいものであるか。

(大野晋著「日本語について」による。)

◇出題パターン 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本人は、道というものは自然に出来るものだと考えて来た。人が歩いて踏み固めた所が道だとした。①「桃李^{とうり}もの言わず、下自ら蹊^{せき}をなす」というのを最も美であるとした。だから道は 人間が進んで金をかけて作ったりするものではないとする考えが日本人の心に巣食っていた。その結果、日本の道路は、世界の文明国で最悪の道路だという評判をとった。

言葉についても、日本人は、自然に言葉は通じ合うものだと安心している。日本人は人と人との間に、絶対に渡ることの出来ない谷があるとは考えていない。我と汝との間に超え得ない断絶があると思っていない。だから、言葉は本来通じるものだと思います。汝^な第二人称)に対してオレだのワレだのボクだのと呼んで、第一人称の代名詞を平気で転用するのも、我と汝との絶対的な対立を考えないからである。英語の世界ではyou(汝)の代りに「我」を使ったりすることは全然考えられない。

契約とは利害相反する者の間で取りかわすものであるが、ヨーロッパでは神さえ人間と契約を結ぶ。旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。聖書は神と人間との契約書であろう。

□、およそ日本人は人間関係を契約ととらえる思想を持っていなかった。相手が自分に背くものだという思想が深い所に無い。だから

問2 桃李もの言わず、下自ら蹊をなす」とありますが、この言葉の意味として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 桃や李のおいしさは、何も言わなくてもだれもが知っている。
- イ 桃や李は、熟して自然に落ちるまで待つて手に入れるものだ。
- ウ 桃や李の花や実を求めて人が集まるので、自然に道が出来る。
- エ 桃や李は、道のある所に実がなるので、人々に重宝される。

問2

「桃李ものを言わず、下自^{しも}ずから蹊^{せき}をなす」というのを最も美であるとしたから、道は、人間が進んで金をかけてつけて作^{つく}ったりするものではないとする考えが日本人の心に巣食った結果、日本の道路は、世界の文明国で最悪の道路だという評判をとった」

ら、言葉がたやすく通じらなと思う。どっちみち通じるなら、言葉そのものはあまり重く見る要がない。表現の形式そのものを軽く扱う。この基本的観念が、国語教育の、基礎教育全体で占める割合のひどい低さを甘受させる。

ヨーロッパ人は、我と汝との間に超え難い断絶があると認識している。言葉は、その深い谷を、わずかに渡そうとする橋である。言葉はおのずからには通じない。通じようとして人間のかける橋である。それゆえ、かけ方によっては向う岸に着けないものだと考える。だから橋を注意深く構築する。そして子供には、橋の形式を、きびしく教え込む。

日本人は、根本においてこの考え方を持たないから、言葉や文字を学ぶ時間を減らして、それを他の学科に向けた方が利益だというような意見にも寛容で、それをたやすく通じた。しかし、言葉・文字の機能は、それほどなまやさしいものであるうか。

(大野晋著「日本語について」による。)

◇出題パターン 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本人は、道というものは自然に出来るものだと考えて来た。人が歩いて踏み固めた所が道だとした。①「桃李^{とうり}もの言わず、下自ら蹊^{せき}をなす」というのを最も美であるとした。だから 道は 人間が進んで金をかけて作ったりするものではないとする考えが日本人の心に巢食^{すく}っていた。その結果、日本の道路は、世界の文明国で最悪の道路だという評判をとった。

言葉についても、日本人は、自然に言葉は通じ合うものだと安心している。日本人は人と人との間に、絶対に渡ることの出来ない谷があるとは考えていない。我と汝との間に超え得ない断絶があると思っていない。だから、言葉は本来通じるものだと思います。汝^な第二人称)に対してオレだのワレだのボクだのと呼んで、第一人称の代名詞を平気で転用するのも、我と汝との絶対的な対立を考えないからである。英語の世界ではyou(汝)の代りに「我」を使ったりすることは全然考えられない。

契約とは利害相反する者の間で取りかわすものであるが、ヨーロッパでは神さえ人間と契約を結ぶ。旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。聖書は神と人間との契約書であろう。

□、およそ日本人は人間関係を契約ととらえる思想を持っていない。相手が自分に背くものだという思想が深い所に無い。だから

問2 桃李もの言わず、下自ら蹊をなす」とありますが、この言葉の意味として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 桃や李のおいしさは、何も言わなくてもだれもが知っている。
 イ 桃や李は、熟して自然に落ちるまで待って手に入れるものだ。
 ウ 桃や李の花や実を求めて人が集まるので、自然に道が出来る。
 エ 桃や李は、道のある所に実がなるので、人々に重宝される。

問2

「桃李ものを言わず、下自^{しも}ずから蹊^{せき}をなす」というのを最も美であるとしたから、道は、人間が進んで金をかけてつけて作^{つく}ったりするものではないとする考えが日本人の心に巢食^{すく}つた結果、日本の道路は、世界の文明国で最悪の道路だという評判をとい^いった」

ら、言葉がたやすく通じらな^らず、どっちも通じらな^らず、言葉そのものはあまり重く見る要がない。表現の形式そのものを軽く扱う。この基本的観念が、国語教育の、基礎教育全体で占める割合のひどい低さを甘受させる。

ヨーロッパ人は、我と汝との間に超え難い断絶があると認識している。言葉は、その深い谷を、わずかに渡そうとする橋である。言葉はおのずからには通じない。通じようとして人間のかける橋である。それゆえ、かけ方によっては向う岸に着けないものだと考える。だから橋を注意深く構築する。そして子供には、橋の形式を、きびしく教え込む。

日本人は、根本においてこの考え方を持たないから、言葉や文字を学ぶ時間を減らして、それを他の学科に向けた方が利益だというような意見にも寛容で、それをたやすく通じた。しかし、言葉・文字の機能は、それほどなまやさしいものであるか。

(大野晋著「日本語について」による。)

◇出題パターン 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本人は、道というものは自然に出来るものだと考えて来た。人が歩いて踏み固めた所が道だとした。「桃李^①の言わず、下自ら^②蹊^③をなす」というのを最も美であるとした。だから、道は、人間が進んで金をかけて作ったりするものではないとする考えが日本人の心に巣食っていた。その結果、日本の道路は、世界の文明国で最悪の道路だという評判をとった。

言葉についても、日本人は、自然に言葉は通じ合うものだと安心している。日本人は人と人との間に、絶対に渡ることの出来ない谷があるとは考えていない。我と汝との間に超え得ない断絶があると思っていない。だから、言葉は本来通じるものだと思います。汝第二人称)に対してオレだのワレだのボクだのと呼んで、第一人称の代名詞を平気で転用するのも、我と汝との絶対的な対立を考えないからである。英語の世界ではyou(汝)の代りに「我」を使ったりすることは全然考えられない。

契約とは利害相反する者の間で取りかわすものであるが、ヨーロッパでは神さへ人間と契約を結ぶ。旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。聖書は神と人間との契約書であろう。

□、およそ日本人は人間関係を契約ととらえる思想を持っていなかった。相手が自分に背くものだという思想が深い所に無い。だから

問4 言葉はおのずかには通じない。とありますが、どういう意味ですか。最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 言葉が通じ合うようにするには、相手の立場を理解しようという姿勢が必要で、そうでなければ言葉は通じない。
- イ 言葉はひとりでに通じるものではなく、形式や使い方を整えることで初めて通じるものである。
- ウ 言葉は、利害相反する者の間で取りかわされる契約のようなもので、通じることを前提としているが、通じない場合もある。
- エ 言葉というものは、初めは全く通じないが、時間をかければ自然に通じるようになるものである。

問4 比喩

通じようとして人間がかかる橋である。

それゆえ、かけ方によっては向こう岸につけないものだ

だから橋を注意深く構築する。

そして子どもには、橋の形式を、厳しく教え込む。

ら、言葉がたやすく通じらると思う。どっちみち通じるなら、言葉そのものはあまり重く見る要がない。表現の形式そのものを軽く扱う。この基本的観念が、国語教育の、基礎教育全体で占める割合のひどい低さを甘受させる。

ヨーロッパ人は、我と汝との間に超え難い断絶があると認識している。言葉は、その深い谷を、わずかに渡そうとする橋である。言葉はおのずかには通じない。通じようとして人間にかかる橋である。それゆえ、かけ方によっては向う岸に着けないものだと考える。だから橋を注意深く構築する。そして子供には、橋の形式を、きびしく教え込む。

日本人は、根本においてこの考え方を持たないから、言葉や文字を学ぶ時間を減らして、それを他の学科に向けた方が利益だというような意見にも寛容で、それをたやすく通じた。しかし、言葉・文字の機能は、それほどなまやさしいものであるうか。

(大野晋著「日本語について」による。)

◇出題パターン 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本人は、道というものは自然に出来るものだと考えて来た。人が歩いて踏み固めた所が道だとした。^①「桃李^②の言わず、下自ら^③蹊^④をなす」というのを最も美であるとした。だから、道は、人間が進んで金をかけて作ったりするものではないとする考えが日本人の心に巣食っていた。その結果、日本の道路は、世界の文明国で最悪の道路だという評判をとった。

言葉についても、日本人は、自然に言葉は通じ合うものだと安心している。日本人は人と人との間に、絶対に渡ることの出来ない谷があるとは考えていない。我と汝との間に超え得ない断絶があると思っていない。だから、言葉は本来通じるものだと思います。汝^⑤第二人称)に対してオレだのワレだのボクだのと呼んで、第一人称の代名詞を平気で転用するのも、我と汝との絶対的な対立を考えないからである。英語の世界ではyou(汝)の代りに「我」を使ったりすることは全然考えられない。

契約とは利害相反する者の間で取りかわすものであるが、ヨーロッパでは神さへ人間と契約を結ぶ。旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。聖書は神と人間との契約書であろう。

□、およそ日本人は人間関係を契約ととらえる思想を持っていなかった。相手が自分に背くものだという思想が深い所に無い。だから

問4 言葉はおのずからには通じない。とありますが、どういう意味ですか。最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 言葉が通じ合うようにするには、相手の立場を理解しようという姿勢が必要で、そうでなければ言葉は通じない。
- イ 言葉はひとりでは通じるものではなく、形式や使い方を整えることで初めて通じるものである。
- ウ 言葉は、利害相反する者の間で取りかわされる契約のようなもので、通じることを前提としているが、通じない場合もある。
- エ 言葉というものは、初めは全く通じないが、時間をかければ自然に通じるようになるものである。

問4 比喩

通じようとして人間がかかる橋である。^⑥

それゆえ、かけ方によっては向う岸につけられないものだ

だから橋を注意深く構築する。

そして子どもには、橋の形式を、厳しく教え込む。

ら、言葉がたやすく通じらなと思う。どっちみち通じるなら、言葉そのものはあまり重く見る要がない。表現の形式そのものを軽く扱う。この基本的観念が、国語教育の、基礎教育全体で占める割合のひどい低さを甘受させる。

ヨーロッパ人は、我と汝との間に超え難い断絶があると認識している。言葉は、その深い谷を、わずかに渡そうとする橋である。言葉はおのずからには通じない。通じようとして人間にかかる橋である。それゆえ、かけ方によっては向う岸に着けないものだと考える。だから橋を注意深く構築する。そして子供には、橋の形式を、きびしく教え込む。

日本人は、根本においてこの考え方を持たないから、言葉や文字を学ぶ時間を減らして、それを他の学科に向けた方が利益だというような意見にも寛容で、それをたやすく通じた。しかし、言葉・文字の機能は、それほどなまやさしいものであるうか。

(大野晋著「日本語について」による。)

◇出題パターン 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本人は、道というものは自然に出来るものだと考えて来た。人が歩いて踏み固めた所が道だとした。「桃李^①もの言わず、下自ら蹊^②をなす」というのを最も美であるとした。だから、道は、人間が進んで金をかけて作ったりするものではないとする考えが日本人の心に巣食っていた。その結果、日本の道路は、世界の文明国で最悪の道路だという評判をとった。

言葉についても、日本人は、自然に言葉は通じ合うものだと安心している。日本人は人と人との間に、絶対に渡ることの出来ない谷があるとは考えていない。我と汝との間に超え得ない断絶があると思っていない。だから、言葉は本来通じるものだと思います。汝第二人称)に対してオレだのワレだのボクだのと呼んで、第一人称の代名詞を平気で転用するのも、我と汝との絶対的な対立を考えないからである。英語の世界では「汝」の代りに「我」を使ったりすることは全然考えられない。

契約とは利害相反する者の間で取りかわすものであるが、ヨーロッパでは神さへ人間と契約を結ぶ。旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。聖書は神と人間との契約書であろう。

□、およそ日本人は人間関係を契約ととらえる思想を持っていなかった。相手が自分に背くものだという思想が深い所に無い。だから

問5 本文で筆者が述べようとしていることとして最も適切なものを、

次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 日本人は、言葉は自然に通じ合うものだと考えて来たが、その結果、国語以外の学科からも厳密さが失われた。

イ 言葉はおのずから通じるものだという考えから、日本人が国語教育を軽視しているのは嘆かわしい。

ウ 日本人は相手に対しても「ワレ」や「ボク」などを用いることがあるが、それは英語の世界では考えられないことである。

エ 言葉をつくさずとも理解し合えるという考え方は、日本人の寛容さに基づくもので、評価されるべきである。〔 〕

ら、言葉がたやすく通じると思う。どっちみち通じるなら、言葉そのものはあまり重く見る要がない。表現の形式そのものを軽く扱う。この基本的観念が、国語教育の、基礎教育全体で占める割合のひどい低さを甘受させる。

ヨーロッパ人は、我と汝との間に超え難い断絶があると認識している。言葉は、その深い谷を、わずかに渡そうとする橋である。言葉はおのずからには通じない。通じようとして人間のかける橋である。それゆえ、かけ方によっては向う岸に着けないものだと考える。だから橋を注意深く構築する。そして子供には、橋の形式を、きびしく教え込む。

日本人は、根本においてこの考え方を持たないから、言葉や文字を学ぶ時間を減らして、それを他の学科に向けた方が利益だというような意見にも寛容で、それをたやすく通じた。しかし、言葉・文字の機能は、それほどなまやさしいものであるうか。

(大野晋著「日本語について」による。)

◇出題パターン 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本人は、道というものは自然に出来るものだと考えて来た。人が歩いて踏み固めた所が道だとした。「桃李^①もの言わず、下自ら蹊^②をなす」というのを最も美であるとした。だから、道は、人間が進んで金をかけて作ったりするものではないとする考えが日本人の心に巣食っていた。その結果、日本の道路は、世界の文明国で最悪の道路だという評判をとった。

言葉についても、日本人は、自然に言葉は通じ合うものだと安心している。日本人は人と人との間に、絶対に渡ることの出来ない谷があるとは考えていない。我と汝との間に超え得ない断絶があると思っていない。だから、言葉は本来通じるものだと思います。汝第二人称)に対してオレだのワレだのボクだのと呼んで、第一人称の代名詞を平気で転用するのも、我と汝との絶対的な対立を考えないからである。英語の世界ではyou(汝)の代りに「我」を使ったりすることは全然考えられない。

契約とは利害相反する者の間で取りかわすものであるが、ヨーロッパでは神さへ人間と契約を結ぶ。旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。聖書は神と人間との契約書であろう。

□、およそ日本人は人間関係を契約ととらえる思想を持っていなかった。相手が自分に背くものだという思想が深い所に無い。だから

問5 本文で筆者が述べようとしていることとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

✕ 日本人は、言葉は自然に通じ合うものだと考えて来たが、その結果、国語以外の学科からも厳密さが失われた。

イ 言葉はおのずから通じるものだという考えから、日本人が国語教育を軽視しているのは嘆かわしい。

ウ 日本人は相手に対しても「ワレ」や「ボク」などを用いることがあるが、それは英語の世界では考えられないことである。

エ 言葉をつくさずとも理解し合えるという考え方は、日本人の寛容さに基づくもので、評価されるべきである。〔 〕

ら、言葉がたやすく通じらなと思う。どっちみち通じるなら、言葉そのものはあまり重く見る要がない。表現の形式そのものを軽く扱う。この基本的観念が、国語教育の、基礎教育全体で占める割合のひどい低さを甘受させる。

ヨーロッパ人は、我と汝との間に超え難い断絶があると認識している。言葉は、その深い谷を、わずかに渡そうとする橋である。言葉はおのずからには通じない。通じようとして人間のかける橋である。それゆえ、かけ方によっては向う岸に着けないものだと考える。だから橋を注意深く構築する。そして子供には、橋の形式を、きびしく教え込む。

日本人は、根本においてこの考え方を持たないから、言葉や文字を学ぶ時間を減らして、それを他の学科に向けた方が利益だというような意見にも寛容で、それをたやすく通じた。しかし、言葉・文字の機能は、それほどなまやさしいものであるか。

(大野晋著「日本語について」による。)

◇出題パターン 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本人は、道というものは自然に出来るものだと考えて来た。人が歩いて踏み固めた所が道だとした。「桃李^①もの言わず、下自ら蹊^②をなす」というのを最も美であるとした。だから、道は、人間が進んで金をかけて作ったりするものではないとする考えが日本人の心に巣食っていた。その結果、日本の道路は、世界の文明国で最悪の道路だという評判をとった。

言葉についても、日本人は、自然に言葉は通じ合うものと安心してゐる。日本人は人と人との間に、絶対に渡ることの出来ない谷があるとは考えていない。我と汝との間に超え得ない断絶があると思っていない。だから、言葉は本来通じるものだと思います。汝第二人称)に対してオレだのワレだのボクだのと呼んで、第一人称の代名詞を平気で転用するのも、我と汝との絶対的な対立を考えないからである。英語の世界ではyou(汝)の代りに「我」を使ったりすることは全然考えられない。

契約とは利害相反する者の間で取りかわすものであるが、ヨーロッパでは神さへ人間と契約を結ぶ。旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。聖書は神と人間との契約書であろう。

□、およそ日本人は人間関係を契約ととらえる思想を持っていなかった。相手が自分に背くものだという思想が深い所に無い。だから

問5 本文で筆者が述べようとしていることとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

✕ ア 日本人は、言葉は自然に通じ合うものだと考えて来たが、その結果、国語以外の学科からも厳密さが失われた。

イ 言葉はおのずから通じるものだという考えから、日本人が国語教育を軽視しているのは嘆かましい。

ウ 日本人は相手に対しても「ワレ」や「ボク」などを用いることがあるが、それは英語の世界では考えられないことである。

エ 言葉をつくさずとも理解し合えるという考え方は、日本人の寛容さに基づくもので、評価されるべきである。〔 〕

ら、言葉がたやすく通じらなと思う。どっちみち通じるなら、言葉そのものはあまり重く見る要がない。表現の形式そのものを軽く扱う。この基本的観念が、国語教育の、基礎教育全体で占める割合のひどい低さを甘受させる。

ヨーロッパ人は、我と汝との間に超え難い断絶があると認識している。言葉は、その深い谷を、わずかに渡そうとする橋である。言葉はおのずからには通じない。通じようとして人間のかける橋である。それゆえ、かけ方によっては向う岸に着けないものだと考える。だから橋を注意深く構築する。そして子供には、橋の形式を、きびしく教え込む。

日本人は、根本においてこの考え方を持たないから、言葉や文字を学ぶ時間を減らして、それを他の学科に向けた方が利益だというような意見にも寛容で、それをたやすく通じた。しかし、言葉・文字の機能は、それほどなまやさしいものであるうか。

(大野晋著「日本語について」による。)

◇出題パターン 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本人は、道というものは自然に出来るものだと考えて来た。人が歩いて踏み固めた所が道だとした。「桃李^①もの言わず、下自ら蹊^{せみち}をなす」というのを最も美であるとした。だから、道は、人間が進んで金をかけて作ったりするものではないとする考えが日本人の心に巣食っていた。その結果、日本の道路は、世界の文明国で最悪の道路だという評判をとった。

言葉についても、日本人は、自然に言葉は通じ合うものだと安心している。日本人は人と人との間に、絶対に渡ることの出来ない谷があるとは考えていない。我と汝との間に超え得ない断絶があると思っていない。だから、言葉は本来通じるものだと思います。汝第二人称)に対してオレだのワレだのボクだのと呼んで、第一人称の代名詞を平気で転用するのも、我と汝との絶対的な対立を考えないからである。英語の世界ではyou(汝)の代りに「我」を使ったりすることは全然考えられない。

契約とは利害相反する者の間で取りかわすものであるが、ヨーロッパでは神さへ人間と契約を結ぶ。旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。聖書は神と人間との契約書であろう。

□、およそ日本人は人間関係を契約ととらえる思想を持っていなかった。相手が自分に背くものだという思想が深い所に無い。だから

問5 本文で筆者が述べようとしていることとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

✕ ア 日本人は、言葉は自然に通じ合うものだと考えて来たが、その結果、国語以外の学科からも厳密さが失われた。

○ イ 言葉はおのずから通じるものだという考えから、日本人が国語教育を軽視しているのは嘆かわしい。

ウ 日本人は相手に対しても「ワレ」や「ボク」などを用いることがあるが、それは英語の世界では考えられないことである。

エ 言葉をつくさずとも理解し合えるという考え方は、日本人の寛容さに基づくもので、評価されるべきである。〔 〕

ら、言葉がたやすく通じらなと思う。どっちみち通じるなら、言葉そのものはあまり重く見る要がない。表現の形式そのものを軽く扱う。この基本的観念が、国語教育の、基礎教育全体で占める割合のひどい低さを甘受させる。

ヨーロッパ人は、我と汝との間に超え難い断絶があると認識している。言葉は、その深い谷を、わずかに渡そうとする橋である。言葉はおのずからには通じない。通じようとして人間のかける橋である。それゆえ、かけ方によっては向う岸に着けないものだと考える。だから橋を注意深く構築する。そして子供には、橋の形式を、きびしく教え込む。

日本人は、根本においてこの考え方を持たないから、言葉や文字を学ぶ時間を減らして、それを他の学科に向けた方が利益だというような意見にも寛容で、それをたやすく通じた。しかし、言葉・文字の機能は、それほどなまやさしいものであるうか。

(大野実著「日本語について」による。)

問5 イ

◇出題パターン 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本人は、道というものは自然に出来るものだと考えて来た。人が歩いて踏み固めた所が道だとした。「桃李^①もの言わず、下自ら蹊^②をなす」というのを最も美であるとした。だから、道は、人間が進んで金をかけて作ったりするものではないとする考えが日本人の心に巣食っていた。その結果、日本の道路は、世界の文明国で最悪の道路だという評判をとった。

言葉についても、日本人は、自然に言葉は通じ合うものだと安心している。日本人は人と人との間に、絶対に渡ることの出来ない谷があるとは考えていない。我と汝との間に超え得ない断絶があると思っていない。だから、言葉は本来通じるものだと思います。汝第二人称)に対してオレだのワレだのボクだのと呼んで、第一人称の代名詞を平気で転用するのも、我と汝との絶対的な対立を考えないからである。英語の世界ではyou(汝)の代りに「我」を使ったりすることは全然考えられない。

契約とは利害相反する者の間で取りかわすものであるが、ヨーロッパでは神さへ人間と契約を結ぶ。旧約聖書、新約聖書の約とは契約である。聖書は神と人間との契約書であろう。

□、およそ日本人は人間関係を契約ととらえる思想を持っていなかった。相手が自分に背くものだという思想が深い所に無い。だから

問5 本文で筆者が述べようとしていることとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

✕ 日本人は、言葉は自然に通じ合うものだと考えて来たが、その結果、国語以外の学科からも厳密さが失われた。

○ イ 言葉はおのずから通じるものだという考えから、日本人が国語教育を軽視しているのは嘆かわしい。

✕ 日本人は相手に対しても「ワレ」や「ボク」などを用いることがあるが、それは英語の世界では考えられないことである。

✕ 言葉をつくさずとも理解し合えるという考え方は、日本人の寛容さに基づくもので、評価されるべきである。

問5 イ

ら、言葉がたやすく通じらぬと思う。どっちみち通じるなら、言葉そのものはあまり重く見る要がない。表現の形式そのものを軽く扱う。この基本的観念が、国語教育の、基礎教育全体で占める割合のひどい低さを甘受させる。

ヨーロッパ人は、我と汝との間に超え難い断絶があると認識している。言葉は、その深い谷を、わずかに渡そうとする橋である。言葉はおのずからには通じない。通じようとして人間のかける橋である。それゆえ、かけ方によっては向う岸に着けないものだと考える。だから橋を注意深く構築する。そして子供には、橋の形式を、きびしく教え込む。

日本人は、根本においてこの考え方を持たないから、言葉や文字を学ぶ時間を減らして、それを他の学科に向けた方が利益だというような意見にも寛容で、それをたやすく通じた。しかし、言葉・文字の機能は、それほどなまやさしいものであるうか。

(大野実著「日本語について」による。)

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 山里での労働は多くが自然条件を利用したものである。畑でも雑草栽培でも、山村の条件を生かすことなしにはなりたたない。もちろんそのことは山村以外のすべての労働にも多かれ少なかれ言うことができる。しかしたとえば都市の労働は、自然を克服することに大きな目的が置かれている。工場は自然の変化にかかわりなくつねに一定の温度と一定の湿度のもとで動かされなければならない。人々は夏でも冬でも同じように勤務しなければならない。

僕はそんな人間の生活が好きではない。木や草だって春には芽を出し、冬にはじっと静かな生活に入るではないか。山女や岩魚は春になるとエサを食べてふとり、夏には夏ヤセをして、秋には再びまるまると太り、冬には氷の下で細くなって暮している。熊やり、すも秋には木の実を食べて体中に脂肪がつき、冬にはその脂肪を減らしながらゆっくり春の来るのを待つ。

そこには季節に合わせた一年のリズムがある。しかし人間にだけはそのリズムがない。一年中同じように働き、同じように生活しなければならない。それが僕には気に入らないのである。

それは自然の一員としてあるだけでなく、自然を克服することによってのみ生きることのできる人間にさすけられた宿命であるかにも見える。だが果してそうなのであろうか。

もちろん人間にそのような宿命のあることを僕も否定することはできない。しかしそのような側面が強まってきたのは、やはり近代以降の歴史においてであることも、また事実であるように思えるのである。

かつて我々はもつと一年のサイクルを利用して生きてきたのではない。かっただらうか。春には春の仕事が、夏には夏の仕事が、そして冬にも秋にもそれに適した仕事と生活があった。そのリズムを崩してき

たのは、都市の労働と生活である。

都市の生産活動は、一年の自然条件の変化に左右されずに生産がつけられることを目的にしている。一年中変わらない生産活動―それに人々の生活も合わせられる。その結果人間の生活様式も一年中変わらないとはなくなる。たいいていの都市の人々は、生活をつくるために労働をしているのだと考えているにちがいない。労働は生活の手段だ。④

しかしこの生産(労働)と生活の関係は、実際には根本的なところで逆になっているのではないかと思える。都市型生産のシステムを維持することに生活のリズムを合わせているのである。

もちろん山村の生活と労働の関係も、生活のリズムに合わせた労働であるといきれるわけではない。出荷にいそがしい時期には、それに生活も規定される。しかし山里での生活と労働には四季があり、そしてそのいそがしい時期をどのようにいそがしくするかどうかは村人個人の判断である。⑤

なめこの出荷価格が上がったとしても、別にいそいでなめこを出荷しなくてもかまわない。村人は今日はこのくらい労働をしようというように、自分の労働量を自分で決めることができる。

いそがしさ自身が、自分の能動的判断にもとづいて実現する。外から強制されてはいない。自分の労働時間と労働密度を自分でコントロールする。非労働時間―生活時間をとれぐらいにするかも自分で決定する。人々は自分の生活のあり方をも自分で決めているといえるのである。

そのうえ労働は直接自分の生活の創造にはわかえってくる。畑仕事に精を出すことは、そのまま自分の生活で消費するものをつくっていくこと、すなわち生活そのものである。⑥

浜平の宿でつくっている葺は、ほとんどが自家消費分である。⑦

⑧

⑨

⑩

⑪

⑫

⑬

⑭

⑮

⑯

⑰

⑱

⑲

⑳

㉑

㉒

㉓

㉔

㉕

㉖

㉗

㉘

㉙

㉚

㉛

㉜

㉝

㉞

㉟

㊱

㊲

㊳

㊴

㊵

㊶

㊷

㊸

㊹

㊺

㊻

㊼

㊽

㊾

㊿

問1 山里での労働 ① 都市の労働 ② とありますが、次は、それらをお

比してまとめたものです。空欄ア・イにあてはまる言葉を本文中から探し、アは四字、イは十二字で書き抜きなさい。

山里での労働		都市の労働	
<p>ア</p> <div style="border: 1px solid black; height: 40px; width: 100%;"></div> <p>を利用したもので、人々は季節に合わせて働く。</p>	<p>イ</p> <div style="border: 1px solid black; height: 100px; width: 100%;"></div> <p>がなく、人々は夏でも冬でも同じように働く。</p>		

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

山里での労働は多くが自然条件を利用したものである。畑でも雑草栽培でも、山村の条件を生かすことなしにはなりたない。もちろんそのことは山村以外のすべての労働にも多かれ少なかれ言うことができる。しかしたとえば都市の労働は、自然を克服することに大きな目的が置かれている。工場は自然の変化にかかわりなくつねに一定の温度と一定の湿度のもとで動かされなければならない。人々は夏でも冬でも同じように勤務しなければならない。

僕はそのような人間の生活が好きではない。木や草だって春には芽を出し、冬にはじつと静かな生活に入らないか。山女や岩魚は春になるとエサを食べてふとり、夏には夏ヤセをして、秋には再びまるまると太り、冬には氷の下で細くなって暮している。熊や、すも秋には木の实を食べて体中に脂肪がつき、冬にはその脂肪を減らしながらゆっくり春の来るのを待つ。

そこには季節に合わせた一年のリズムがある。しかし人間にだけはそのリズムがない。一年中同じように働き、同じように生活しなければならない。それが僕には気に入らないのである。

それは自然の一員としてあるだけでなく、自然を克服することによってのみ生きることのできる人間にさすけられた宿命であるかにも見える。だが果してそうなのであろうか。

もちろん人間にそのような宿命のあることを僕も否定することはできない。しかしそのような側面が強まってきたのは、やはり近代以降の歴史においてであることも、また事実であるように思えるのである。かつて我々はもつと一年のサイクルを利用して生きてきたのとはなかったのだろうか。春には春の仕事が、夏には夏の仕事が、そして冬にも秋にもそれに適した仕事と生活があった。そのリズムを崩してき

たのは、都市の労働と生活である。

都市の生産活動は、一年の自然条件の変化に左右されずに生産がつけられることを目的にしている。一年中変わらない生産活動—それ人々の生活も合わせられる。その結果人間の生活様式も一年中変わることはなくなる。たいいていの都市の人々は、生活をつくるために労働をしているのだと考えているにちがいない。労働は生活の手段だ。しかしこの生産(労働)と生活の関係は、実際には根本的なところで逆になっているのではないかと思える。都市型生産のシステムを維持することに生活のリズムを合わせているのである。

もちろん山村の生活と労働の関係も、生活のリズムに合わせた労働であるといきれるわけではない。出荷にいそがしい時期には、それに生活も規定される。しかし山里での生活と労働には四季があり、そしてそのいそがしい時期をどのようにいそがしくするかどうかは村人個人の判断である。なめこの出荷価格が上がったとしても、別にいそいでなめこを出荷しなくてもかまわない。村人は今日はこのくらいの労働をしようというように、自分の労働量を自分で決めることができる。

いそがしさ自身が、自分の能動的判断にもとづいて実現する。外から強制されてはいない。自分の労働時間と労働密度を自分でコントロールする。非労働時間—生活時間をとれぐらいにするかも自分で決定する。人々は自分の生活のあり方をも自分で決めているといえるのである。

そのうえ労働は直接自分の生活の創造にはわかえってくる。畑仕事に精を出すことは、そのまま自分の生活で消費するものをつくっていくこと、すなわち生活そのものである。浜平の宿でつくっている葺は、ほとんどが自家消費分である。ということは葺をつくる労働自身が生活なのである。

問1 山里での労働 都市の労働 とありますが、次は、それらをお

比してまとめたものです。空欄ア・イにあてはまる言葉を本文中から探し、アは四字、イは十三字で書き抜きなさい。

山里での労働	
都市の労働	

ア

自	然	条	件
を利用したも			

ので、人々は季節に合わせて働

イ

がなく、人々は夏でも冬でも同じように働く。

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

山里での労働は多くが**自然条件**を利用したものである。畑でも**雑草**栽培でも、山村の条件を生かすことなしにはなりたたない。もちろんそのことは山村以外のすべての労働にも多かれ少なかれ言うことができる。しかしたとえば**都市の労働**は、自然を克服することに大きな目的が置かれている。工場は**自然の変化**にかかわりなくつねに一定の温度と一定の湿度のもとで動かされなければならない。人々は夏でも冬でも同じように勤務しなければならない。

僕はそのような人間の生活が好きではない。木や草だって春には芽を出し、冬にはじっと静かな生活に入るではないか。山女や岩魚は春になるとエサを食べてふとり、夏には夏ヤセをして、秋には再びまるまると太り、冬には氷の下で細くなって暮している。熊やり、すも秋には木の实を食べて体中に脂肪がつき、冬にはその脂肪を減らしながらゆっくり春の来るのを待つ。

そこには季節に合わせた一年のリズムがある。しかし人間にだけはそのリズムがない。一年中同じように働き、同じように生活しなければならない。それが僕には気に入らないのである。

それは自然の一員としてあるだけでなく、自然を克服することによってのみ生きることのできる人間にさすけられた宿命であるかにも見える。だが果してそうなのであろうか。

もちろん人間にそのような宿命のあることを僕も否定することはできない。しかしそのような側面が強まってきたのは、やはり近代以降の歴史においてであることも、また事実であるように思えるのである。

かつて我々は何もつと一年のサイクルを利用して生きてきたのとはなかったのだろうか。春には春の仕事が、夏には夏の仕事が、そして冬にも秋にもそれに適した仕事と生活があった。そのリズムを崩してき

たのは、都市の労働と生活である。

都市の生産活動は、一年の自然条件の変化に左右されずに生産がつけられることを目的にしている。一年中変わらない生産活動―それ人々の生活も合わせられる。その結果人間の生活様式も一年中変わることはなくなる。たいていの都市の人々は、生活をつくるために労働をしているのだと考えているにちがいない。労働は生活の手段だ。^④しかしこの生産(労働)と生活の関係は、実際には根本的などころで逆になっているのではないかと思える。都市型生産のシステムを維持することに生活のリズムを合わせているのである。

もちろん山村の生活と労働の関係も、生活のリズムに合わせた労働であるといきれるわけではない。出荷にいそがしい時期には、それに生活も規定される。しかし山里での生活と労働には四季があり、そしてそのいそがしい時期をどのようにいそがしくするかどうかは村人個人の判断である。^⑤なめこの出荷価格が上がったとしても、別にいそいでなめこを出荷しなくてもかまわない。村人は今日はこのくらいの労働をしようというように、自分の労働量を自分で決めることができる。いそがしさ自身が、自分の能動的判断にもとづいて実現する。外から強制されてはいない。自分の労働時間と労働密度を自分でコントロールする。非労働時間―生活時間をとれぐらいにするかも自分で決定する。人々は自分の生活のあり方をも自分で決めているといえるのである。

そのうえ労働は直接自分の生活の創造にはわかえってくる。畑仕事に精を出すことは、そのまま自分の生活で消費するものをつくっていくこと、すなわち生活そのものである。浜平の宿でつくっている茸は、ほとんどが自家消費分である。ということは茸をつくる労働自身が生活なのである。

問1 山里での労働^① 都市の労働^② とありますが、次は、それらをお互いに比べてまとめたものです。空欄ア・イにあてはまる言葉を本文中から探し、アは四字、イは十二字で書き抜きなさい。

山里での労働		都市の労働
ア	自然条件	イ
自然条件	を利用したも	が
ので、人々は季節に合わせて働	く。	がなく、人々は夏でも冬でも
同じように働く。		同じように働く。

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

山里での労働は多くが自然条件を利用したものである。畑でも雑草栽培でも、山村の条件を生かすことなしにはなりたない。もちろんそのことは山村以外のすべての労働にも多かれ少なかれ言うことができる。しかしたとえば都市の労働は、自然を克服することに大きな目的が置かれている。工場は自然の変化にかかわりなくつねに一定の温度と一定の湿度のもとで動かされなければならない。人々は夏でも冬でも同じように勤務しなければならない。

僕はそのような人間の生活が好きではない。木や草だって春には芽を出し、冬にはじっと静かな生活に入るではないか。山女や岩魚は春になるとエサを食べてふとり、夏には夏ヤセをして、秋には再びまるまると太り、冬には氷の下で細くなって暮している。熊や、すも秋には木の实を食べて体中に脂肪がつき、冬にはその脂肪を減らしながらゆっくり春の来るのを待つ。

そこには師に合わせた一年のリズムがある。しかし人間にだけはそのリズムがない。一年中同じように働き、同じように生活しなければならない。それが僕には気に入らないのである。

それは自然の一員としてあるだけでなく、自然を克服することによってのみ生きることのできる人間にさすけられた宿命であるかにも見える。だが果してそうなのであろうか。

もちろん人間にそのような宿命のあることを僕も否定することはできない。しかしそのような側面が強まってきたのは、やはり近代以降の歴史においてであることも、また事実であるように思えるのである。

かつて我々は何もつと一年のサイクルを利用して生きてきたのとはなかったのだろうか。春には春の仕事が、夏には夏の仕事が、そして冬にも秋にもそれに適した仕事と生活があった。そのリズムを崩してき

たのは、都市の労働と生活である。

都市の生産活動は、一年の自然条件の変化に左右されずに生産がつけられることを目的にしている。一年中変わらない生産活動―それに人々の生活も合わせられる。その結果人間の生活様式も一年中変わらないとはなくなる。たいていの都市の人々は、生活をつくるために労働をしているのだと考えているにちがいない。労働は生活の手段だ。しかしこの生産(労働)と生活の関係は、実際には根本的などころで逆になっているのではないかと思える。都市型生産のシステムを維持することに生活のリズムを合わせているのである。

もちろん山村の生活と労働の関係も、生活のリズムに合わせた労働であるといきれるわけではない。出荷にいいそがしい時期には、それに生活も規定される。しかし山里での生活と労働には四季があり、そしてそのいいそがしい時期をどのようにいいそがしくするかは村人個人の判断である。なめこの出荷価格が上がったとしても、別にいいでなめこを出荷しなくてもかまわない。村人は今日はこのくらい労働をしようというように、自分の労働量を自分で決めることができる。いそがしい自身が、自分の能動的判断にもとづいて実現する。外から強制されてはいない。自分の労働時間と労働密度を自分でコントロールする。非労働時間―生活時間をとれぐらいにするかも自分で決定する。人々は自分の生活のあり方をも自分で決めているといえるのである。

そのうえ労働は直接自分の生活の創造にはわかえってくる。畑仕事に精を出すことは、そのまま自分の生活で消費するものをつくっていくこと、すなわち生活そのものである。浜平の宿でつくっている葺は、ほとんどが自家消費分である。ということは葺をつくる労働自身が生活なのである。

問1 山里での労働 都市の労働 とありますが、次は、それらを対

比してまとめたものです。空欄ア・イにあてはまる言葉を本文中から探し、アは四字、イは十二字で書き抜きなさい。

山里での労働		都市の労働	
ア	自然条件	イ	季節に合わせ
を利用したもので、人々は季節に合わせて働く。		た一年のリズムがなく、人々は夏でも冬でも同じように働く。	

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

山里での労働は多くが自然条件を利用したものである。畑でも雑草栽培でも、山村の条件を生かすことなしにはなりたない。もちろんそのことは山村以外のすべての労働にも多かれ少なかれ言うことができる。しかしたとえば都市の労働は、自然を克服することに大きな目的が置かれている。工場は自然の変化にかかわりなくつねに一定の温度と一定の湿度のもとで動かされなければならない。人々は夏でも冬でも同じように勤務しなければならない。

僕はそのような人間の生活が好きではない。木や草だって春には芽を出し、冬にはじっと静かな生活に入るではないか。山女や岩魚は春になるとエサを食べてふとり、夏には夏ヤセをして、秋には再びまるまると太り、冬には氷の下で細くなって暮している。熊や、すも秋には木の实を食べて体中に脂肪がつき、冬にはその脂肪を減らしながらゆっくり春の来るのを待つ。

そこには季節に合わせた一年のリズムがある。しかし人間にだけはそのリズムがない。一年中同じように働き、同じように生活しなければならない。それが僕には気に入らないのである。

それは自然の一員としてあるだけでなく、自然を克服することによってのみ生きることのできる人間にさすけられた宿命であるかにも見える。だが果してそうなのであろうか。

もちろん人間にそのような宿命のあることを僕も否定することはできない。しかしそのような側面が強まってきたのは、やはり近代以降の歴史においてであることも、また事実であるように思えるのである。

かつて我々はもつと一年のサイクルを利用して生きてきたのとはななかったのだろうか。春には春の仕事が、夏には夏の仕事が、そして冬にも秋にもそれに適した仕事と生活があった。そのリズムを崩してき

たのは、都市の労働と生活である。

都市の生産活動は、一年の自然条件の変化に左右されずに生産がつけられることを目的にしている。一年中変わらない生産活動―それに人々の生活も合わせられる。その結果人間の生活様式も一年中変わらないとはなくなる。たいいての都市の人々は、生活をつくるために労働をしているのだと考えているにちがいない。労働は生活の手段だ。^④しかしこの生産(労働)と生活の関係は、実際には根本的などころで逆になっているのではないかと思える。都市型生産のシステムを維持することに生活のリズムを合わせているのである。

もちろん山村の生活と労働の関係も、生活のリズムに合わせた労働であるといきれるわけではない。出荷にいいそがしい時期には、それに生活も規定される。しかし山里での生活と労働には四季があり、そしてそのいいそがしい時期をどのようにいそがしくするかどうかは村人個人の判断である。^⑤なめこの出荷価格が上がったとしても、別にいいでなめこを出荷しなくてもかまわない。村人は今日はこのくらい労働をしようというように、自分の労働量を自分で決めることができる。いそがしい自分が、自分の能動的判断にもとづいて実現する。外から強制されてはいない。自分の労働時間と労働密度を自分でコントロールする。非労働時間―生活時間をとれぐらいにするかも自分で決定する。人々は自分の生活のあり方をも自分で決めているといえるのである。

そのうえ労働は直接自分の生活の創造にはわかえってくる。畑仕事に精を出すことは、そのまま自分の生活で消費するものをつくっていくこと、すなわち生活そのものである。^⑥浜平の宿でつくっている葺は、ほとんどが自家消費分である。ということは葺をつくる労働自身が生活なのである。

問2 ① しかしそのような側面が……事実であるように思えるのである。

とありますが、近代以降の歴史の特徴として最も適切なものを、

次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 人間が自然の脅威を感じるようになった。
- イ 人間が自然を克服しようとするようになった。
- ウ 人間が自然とふれあおうとするようになった。
- エ 人間が自然を保護するようになった。

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

山里での労働は多くが自然条件を利用したものである。畑でも雑草栽培でも、山村の条件を生かすことなしにはなりたたない。もちろんそのことは山村以外のすべての労働にも多かれ少なかれ言うことができる。しかしたとえば都市の労働は、自然を克服することに大きな目的が置かれている。工場は自然の変化にかかわりなくつねに一定の温度と一定の湿度のもとで動かされなければならない。人々は夏でも冬でも同じように勤務しなければならない。

僕はそのような人間の生活が好きではない。木や草だって春には芽を出し、冬にはじっと静かな生活に入るではないか。山女や岩魚は春になるとエサを食べてふとり、夏には夏ヤセをして、秋には再びまるまると太り、冬には氷の下で細くなって暮している。熊や猪、秋には木の実を食べて体中に脂肪がつき、冬にはその脂肪を減らしながらゆっくり春の来るのを待つ。

そこには季節に合わせた一年のリズムがある。しかし人間にだけはそのリズムがない。一年中同じように働き、同じように生活しなければならない。それが僕には気にくわなのである。

それは自然の一員としてあるだけでなく、自然を克服することによってのみ生きることのできる人間にさすけられた宿命であるかにみえる。だが果してそうなのであるか。

もちろん人間にそのような宿命のあることを僕も否定することはできない。しかしそのような側面が強まってきたのは、やはり近代以降の歴史においてであることも、また事実であるように思えるのである。

かつて我々はもつと一年のサイクルを利用して生きてきたのではなく、秋に収穫したものを春に蒔き、春には春の仕事が、夏には夏の仕事、そして冬にも秋にもそれに適した仕事と生活があった。そのリズムを崩してき

たのは、都市の労働と生活である。

都市の生産活動は、一年の自然条件の変化に左右されずに生産がつけられることを目的にしている。一年中変わらない生産活動—それに人々の生活も合わせられる。その結果人間の生活様式も一年中変わらないとはなくなる。たいいていの都市の人々は、生活をつくるために労働をしているのだと考えているにちがいない。労働は生活の手段だ。④しかしこの生産(労働)と生活の関係は、実際には根本的などころで逆になっているのではないかと思える。都市型生産のシステムを維持することに生活のリズムを合わせているのである。

もちろん山村の生活と労働の関係も、生活のリズムに合わせた労働であるといきれるわけではない。出荷にいそがしい時期には、それに生活も規定される。しかし山里での生活と労働には四季があり、そしてそのいそがしい時期をどのようにいそがしくするかどうかは村人個人の判断である。なめこの出荷価格が上がったとしても、別にいそいでなめこを出荷しなくてもかまわない。村人は今日はこのくらいの労働をしようというように、自分の労働量を自分で決めることができる。いそがしい自分が、自分の能動的判断にもとづいて実現する。外から強制されてはいない。自分の労働時間と労働密度を自分でコントロールする。非労働時間—生活時間をどれくらいにするかも自分で決定する。人々は自分の生活のあり方をも自分で決めているといえるのである。

そのうえ労働は直接自分の生活の創造にはわかえってくる。畑仕事に精を出すことは、そのまま自分の生活で消費するものをつくっていくこと、すなわち生活そのものである。浜平の宿でつくっている菓は、ほとんどが自家消費分である。ということは菓をつくる労働自身が生活なのである。

問2 ① しかしそのような側面が……事実であるように思えるのである。

とありますが、近代以降の歴史の特徴として最も適切なものを、

次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 人間が自然の脅威を感じるようになった。
- イ 人間が自然を克服しようとするようになった。
- ウ 人間が自然とふれあおうとするようになった。
- エ 人間が自然を保護するようになった。

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

山里での労働は多くが自然条件を利用したものである。畑でも雑草栽培でも、山村の条件を生かすことなしにはなりたない。もちろんそのことは山村以外のすべての労働にも多かれ少なかれ言うことができる。しかしたとえば都市の労働は、自然を克服することに大きな目的が置かれている。工場は自然の変化にかかわりなくつねに一定の温度と一定の湿度のもとで動かされなければならない。人々は夏でも冬でも同じように勤務しなければならない。

僕はそんな人間の生活が好きではない。木や草だって春には芽を出し、冬にはじっと静かな生活に入るではないか。山女や岩魚は春になるとエサを食べてふとり、夏には夏ヤセをして、秋には再びまるまると太り、冬には氷の下で細くなって暮している。熊や、すも秋には木の实を食べて体中に脂肪がつき、冬にはその脂肪を減らしながらゆっくり春の来るのを待つ。

そこには節に合わせた一年のリズムがある。しかし人間にだけはそのリズムがない。一年中同じように働き、同じように生活しなければならない。それが僕には気にくわなのである。

それは自然の一員としてあるだけでなく、自然を克服することによってのみ生きることのできる人間にさすけられた宿命であるかにも見える。だが果してそうなのであろうか。

もちろん人間にそのような宿命のあることを僕も否定することはできない。しかしそのような側面が強まってきたのは、やはり近代以降の歴史においてであることも、また事実であるように思えるのである。

かつて我々はもつと一年のサイクルを利用して生きてきたのではなく、秋に我々にはもつと一年のサイクルを利用して生きてきたのではなく、秋にもそれぞれに適した仕事と生活があった。そのリズムを崩してき

たのは、都市の労働と生活である。

都市の生産活動は、一年の自然条件の変化に左右されずに生産がつけられることを目的にしている。一年中変わらない生産活動—それの人々の生活も合わせられる。その結果人間の生活様式も一年中変わらないこととなる。たいいていの都市の人々は、生活をつくるために労働をしているのだと考えているにちがいない。労働は生活の手段だ。

しかしこの生産(労働)と生活の関係は、実際には根本的などころで逆になっているのではないかと思える。都市型生産のシステムを維持することに生活のリズムを合わせているのである。

もちろん山村の生活と労働の関係も、生活のリズムに合わせた労働であるといきれるわけではない。出荷にいそがしい時期には、それに生活も規定される。しかし山里での生活と労働には四季があり、そしてそのいそがしい時期をどのようにいそがしくするかどうかは村人個人の判断である。なめこの出荷価格が上がったとしても、別にいそいでなめこを出荷しなくてもかまわない。村人は今日はこのくらい労働をしようというように、自分の労働量を自分で決めることができる。

いそがしき自身が、自分の能動的判断にもとづいて実現する。外から強制されてはいない。自分の労働時間と労働密度を自分でコントロールする。非労働時間—生活時間をどれくらいにするかも自分で決定する。人々は自分の生活のあり方をも自分で決めているといえるのである。

そのうえ労働は直接自分の生活の創造にはわかえってくる。畑仕事に精を出すことは、そのまま自分の生活で消費するものをつくっていくこと、すなわち生活そのものである。浜平の宿でつくっている葺は、ほとんどが自家消費分である。ということは葺をつくる労働自身が生活なのである。

問2 ① しかしそのような側面が……事実であるように思えるのである。

とありますが、近代以降の歴史の特徴として最も適切なものを、

次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 人間が自然の脅威を感じるようになった。
- イ 人間が自然を克服しようとするようになった。
- ウ 人間が自然とふれあおうとするようになった。
- エ 人間が自然を保護するようになった。

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

山里での労働は多くが自然条件を利用したものである。畑でも雑草栽培でも、山村の条件を生かすことなしにはなりたない。もちろんそのことは山村以外のすべての労働にも多かれ少なかれ言うことができる。しかしたとえば都市の労働は、自然を克服することに大きな目的が置かれている。工場は自然の変化にかかわりなくつねに一定の温度と一定の湿度のもとで動かされなければならない。人々は夏でも冬でも同じように勤務しなければならない。

僕はそのような人間の生活が好きではない。木や草だって春には芽を出し、冬にはじっと静かな生活に入るではないか。山女や岩魚は春になるとエサを食べてふとり、夏には夏ヤセをして、秋には再びまるまると太り、冬には氷の下で細くなって暮している。熊や、すも秋には木の实を食べて体中に脂肪がつき、冬にはその脂肪を減らしながらゆっくり春の来るのを待つ。

そこには季節に合わせた一年のリズムがある。しかし人間にだけはそのリズムがない。一年中同じように働き、同じように生活しなければならない。それが僕には気にくわないのである。

それは自然の一員としてあるだけでなく、自然を克服することによってのみ生きることのできる人間にさすけられた宿命であるかにも見える。だが果してそうなのであろうか。

もちろん人間にそのような宿命のあることを僕も否定することはできない。しかしそのような側面が強まってきたのは、やはり近代以降の歴史においてであることも、また事実であるように思えるのである。

かつて我々はもつと一年のサイクルを利用して生きてきたのではなく、かたのたのたのた。春には春の仕事が、夏には夏の仕事が、そして冬にも秋にもそれに適した仕事と生活があった。そのリズムを崩してき

たのは、都市の労働と生活である。

都市の生産活動は、一年の自然条件の変化に左右されずに生産がつけられることを目的にしている。一年中変わらない生産活動—それに人々の生活も合わせられる。その結果人間の生活様式も一年中変わらないこととなる。たいていの都市の人々は、生活をつくるために労働をしているのだと考えているにちがいない。労働は生活の手段だ。

しかしこの生産(労働)と生活の関係は、実際には根本的などころで逆になっているのではないかと思える。都市型生産のシステムを維持することに生活のリズムを合わせているのである。

もちろん山村の生活と労働の関係も、生活のリズムに合わせた労働であるといきれるわけではない。出荷にいいそがしい時期には、それに生活も規定される。しかし山里での生活と労働には四季があり、そしてそのいいそがしい時期をどのようにいそがしくするかどうかは村人個人の判断である。なめこの出荷価格が上がったとしても、別にいいでなめこを出荷しなくてもかまわない。村人は今日はこのくらい労働をしようというように、自分の労働量を自分で決めることができる。

いそがしい自身が、自分の能動的判断にもとづいて実現する。外から強制されてはいない。自分の労働時間と労働密度を自分でコントロールする。非労働時間—生活時間をとれぐらいにするかも自分で決定する。人々は自分の生活のあり方をも自分で決めているといえるのである。

そのうえ労働は直接自分の生活の創造にはわかえってくる。畑仕事に精を出すことは、そのまま自分の生活で消費するものをつくっていくこと、すなわち生活そのものである。浜平の宿でつくっている葺は、ほとんどが自家消費分である。ということは葺をつくる労働自身が生活なのである。

問2 ① しかしそのような側面が……事実であるように思えるのである。

とありますが、近代以降の歴史の特徴として最も適切なものを、

次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 人間が自然の脅威を感じるようになった。

イ 人間が自然を克服しようとするようになった。

ウ 人間が自然とふれあおうとするようになった。

エ 人間が自然を保護するようになった。

〔 〕

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

山里での労働は多くが自然条件を利用したものである。畑でも雑草栽培でも、山村の条件を生かすことなしにはなりたない。もちろんそのことは山村以外のすべての労働にも多かれ少なかれ言うことができる。しかしたとえば都市の労働は、自然を克服することに大きな目的が置かれている。工場は自然の変化にかかわりなくつねに一定の温度と一定の湿度のもとで動かされなければならない。人々は夏でも冬でも同じように勤務しなければならない。

僕はそのような人間の生活が好きではない。木や草だって春には芽を出し、冬にはじっと静かな生活に入るではないか。山女や岩魚は春になるとエサを食べてふとり、夏には夏やせをして、秋には再びまるまると太り、冬には氷の下で細くなって暮している。熊や狸、すも秋には木の实を食べて体中に脂肪がつき、冬にはその脂肪を減らしながらゆっくり春の来るのを待つ。

そこには季節に合わせた一年のリズムがある。しかし人間にだけはそのリズムがない。一年中同じように働き、同じように生活しなければならない。それが僕には気に入らないのである。

それは自然の一員としてあるだけでなく、自然を克服することによってのみ生きることのできる人間にさすけられた宿命であるかにも見える。だが果してそうなのであろうか。

もちろん人間にそのような宿命のあることを僕も否定することはできない。しかしそのような側面が強まってきたのは、やはり近代以降の歴史においてであることも、また事実であるように思えるのである。

かつて我々はもつと一年のサイクルを利用して生きてきたのではないだろうか。春には春の仕事が、夏には夏の仕事があり、そして冬にも秋にもそれに適した仕事と生活があった。そのリズムを崩してき

問3 ① しかしこの生産(労働)と生活の関係は、実際には根本的なところで逆になっているのではないかと思える。とありますが、どのようになっているのですか。次の空欄にあてはまる内容を、二十五字以上、三十五字以内で書きなさい。

労働は生活の手段だ

しかしこの生産(労働)と生活の関係は、実際には根本的なところで逆になっているのではないかと思える。

都市型生産のシステムを維持することに生活のリズムを合わせているのである

たのは、都市の労働と生活である。

都市の生産活動は、一年の自然条件の変化に左右されずに生産がつけられることを目的にしている。一年中変わらない生産活動―それに人々の生活も合わせられる。その結果人間の生活様式も一年中変わることはなくなる。たいていの都市の人々は、生活をつくるために労働をしているのだと考えているにちがいない。労働は生活の手段だ。

② しかしこの生産(労働)と生活の関係は、実際には根本的なところで逆になっているのではないかと思える。都市型生産のシステムを維持することに生活のリズムを合わせているのである。

もちろん山村の生活と労働の関係も、生活のリズムに合わせた労働であるといきれるわけではない。出荷にいいそがしい時期には、それに生活も規定される。しかし山里での生活と労働には四季があり、そしてそのいいそがしい時期をどのようにいそがしくするかどうかは村人個人の判断である。なめこの出荷価格が上がったとしても、別にいいのでなめこを出荷しなくてもかまわない。村人は今日はこのくらい労働をしようというように、自分の労働量を自分で決めることができる。

いそがしい自分が、自分の能動的判断にもとづいて実現する。外から強制されてはいない。自分の労働時間と労働密度を自分でコントロールする。非労働時間―生活時間をどれぐらいにするかも自分で決定する。人々は自分の生活のあり方をも自分で決めているといえるのである。

そのうえ労働は直接自分の生活の創造にはわかえってくる。畑仕事に精を出すことは、そのまま自分の生活で消費するものをつくっていくこと、すなわち生活そのものである。浜平の宿でつくっている葺は、ほとんどが自家消費分である。ということは葺をつくる労働自身が生活なのである。

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

山里での労働は多くが自然条件を利用したものである。畑でも雑草栽培でも、山村の条件を生かすことなしにはなりたない。もちろんそのことは山村以外のすべての労働にも多かれ少なかれ言うことができる。しかしたとえば都市の労働は、自然を克服することに大きな目的が置かれている。工場は自然の変化にかかわりなくつねに一定の温度と一定の湿度のもとで動かされなければならない。人々は夏でも冬でも同じように勤務しなければならない。

僕はそのような人間の生活が好きではない。木や草だって春には芽を出し、冬にはじっと静かな生活に入るではないか。山女や岩魚は春になるとエサを食べてふとり、夏には夏やせをして、秋には再びまるまると太り、冬には氷の下で細くなって暮している。熊や、すも秋には木の実を食べて体中に脂肪がつき、冬にはその脂肪を減らしながらゆっくり春の来るのを待つ。

そこには季節に合わせた一年のリズムがある。しかし人間にだけはそのリズムがない。一年中同じように働き、同じように生活しなければならない。それが僕には気に入らないのである。

それは自然の一員としてあるだけでなく、自然を克服することによってのみ生きることのできる人間にさすけられた宿命であるかにも見える。だが果してそうなのであろうか。

もちろん人間にそのような宿命のあることを僕も否定することはできない。しかしそのような側面が強まってきたのは、やはり近代以降の歴史においてであることも、また事実であるように思えるのである。

かつて我々はもつと一年のサイクルを利用して生きてきたのではなく、かたのたのたのた。春には春の仕事が、夏には夏の仕事が、そして冬にも秋にもそれに適した仕事と生活があった。そのリズムを崩してき

問3 ①しかしこの生産(労働)と生活の関係は、実際には根本的なところで逆になっているのではないかと思える。とありますが、どのような内容か、二十五字以上、三十五字以内で書きなさい。

労働は生活の手段だ

しかしこの生産労働と生活の関係は、逆になっている。

都市型生産のシステムを維持することに生活のリズムを合わせているのである

たのは、都市の労働と生活である。

都市の生産活動は、一年の自然条件の変化に左右されずに生産がつけられることを目的にしている。一年中変わらない生産活動―それに人々の生活も合わせられる。その結果人間の生活様式も一年中変わることはなくなる。たいていの都市の人々は、生活をつくるために労働をしているのだと考えているにちがいない。労働は生活の手段だ。

②しかしこの生産(労働)と生活の関係は、実際には根本的なところで逆になっているのではないかと思える。都市型生産のシステムを維持することに生活のリズムを合わせているのである。

もちろん山村の生活と労働の関係も、生活のリズムに合わせた労働であるといえるわけではない。出荷にいいそがしい時期には、それに生活も規定される。しかし山里での生活と労働には四季があり、そしてそのいいそがしい時期をどのようにいそがしくするかどうかは村人個人の判断である。なめこの出荷価格が上がったとしても、別にいいでなめこを出荷しなくてもかまわない。村人は今日はこのくらい労働をしようというように、自分の労働量を自分で決めることができる。

いそがしい自身が、自分の能動的判断にもとづいて実現する。外から強制されてはいない。自分の労働時間と労働密度を自分でコントロールする。非労働時間―生活時間をどれくらいにするかも自分で決定する。人々は自分の生活のあり方をも自分で決めているといえるのである。

そのうえ労働は直接自分の生活の創造にはわかえってくる。畑仕事に精を出すことは、そのまま自分の生活で消費するものをつくっていくこと、すなわち生活そのものである。浜平の宿でつくっている草は、ほとんどが自家消費分である。ということは草をつくる労働自身が生活なのである。

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

山里での労働は多くが自然条件を利用したものである。畑でも雑草栽培でも、山村の条件を生かすことなしにはなりたない。もちろんそのことは山村以外のすべての労働にも多かれ少なかれ言うことができる。しかしたとえば都市の労働は、自然を克服することに大きな目的が置かれている。工場は自然の変化にかかわりなくつねに一定の温度と一定の湿度のもとで動かされなければならない。人々は夏でも冬でも同じように勤務しなければならない。

僕はそのような人間の生活が好きではない。木や草だって春には芽を出し、冬にはじっと静かな生活に入るではないか。山女や岩魚は春になるとエサを食べてふとり、夏には夏やせをして、秋には再びまるまると太り、冬には氷の下で細くなって暮している。熊や、人も秋には木の実を食べて体中に脂肪がつき、冬にはその脂肪を減らしながらゆっくり春の来るのを待つ。

そこには季節に合わせた一年のリズムがある。しかし人間にだけはそのリズムがない。一年中同じように働き、同じように生活しなければならない。それが僕には気に入らないのである。

それは自然の一員としてあるだけでなく、自然を克服することによってのみ生きることのできる人間にさすけられた宿命であるかにも見える。だが果してそうなのであろうか。

もちろん人間にそのような宿命のあることを僕も否定することはできない。しかしそのような側面が強まってきたのは、やはり近代以降の歴史においてであることも、また事実であるように思えるのである。

かつて我々はもつと一年のサイクルを利用して生きてきたのではなく、かたのだからか。春には春の仕事が、夏には夏の仕事が、そして冬にも秋にもそれに適した仕事と生活があった。そのリズムを崩してき

問3 ① しかしこの生産(労働)と生活の関係は、実際には根本的などころで逆になっているのではないかと思える。とありますが、どのような内容か、二十五字以上、三十五字以内で書きなさい。

労働は生活の手段だ

しかしこの生産労働と生活の関係は、逆になっている。

都市型生産のシステムを維持することに生活のリズムを合わせているのである

たのは、都市の労働と生活である。

都市の生産活動は、一年の自然条件の変化に左右されずに生産がつけられることを目的にしている。一年中変わらない生産活動―それに人々の生活も合わせられる。その結果人間の生活様式も一年中変わることはなくなる。たいいていの都市の人々は、生活をつくるために労働をしているのだと考えているにちがいない。労働は生活の手段だ。

④ しかしこの生産(労働)と生活の関係は、実際には根本的などころで逆になっているのではないかと思える。都市型生産のシステムを維持することに生活のリズムを合わせているのである。

もちろん山村の生活と労働の関係も、生活のリズムに合わせた労働であるといきれるわけではない。出荷にいいそがしい時期には、それに生活も規定される。しかし山里での生活と労働には四季があり、そしてそのいいそがしい時期をどのようにいそがしくするかどうかは村人個人の判断である。なめこの出荷価格が上がったとしても、別にいいでなめこを出荷しなくてもかまわない。村人は今日はこのくらいの労働をしようというように、自分の労働量を自分で決めることができる。

いそがしい自身が、自分の能動的判断にもとづいて実現する。外から強制されてはいない。自分の労働時間と労働密度を自分でコントロールする。非労働時間―生活時間をどれくらいにするかも自分で決定する。人々は自分の生活のあり方をも自分で決めているといえるのである。

そのうえ労働は直接自分の生活の創造にはわかえってくる。畑仕事に精を出すことは、そのまま自分の生活で消費するものをつくっていくこと、すなわち生活そのものである。浜平の宿でつくっている草は、ほとんどが自家消費分である。ということは草をつくる労働自身が生活なのである。

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

山里での労働は多くが自然条件を利用したものである。畑でも雑草栽培でも、山村の条件を生かすことなしにはなりたない。もちろんそのことは山村以外のすべての労働にも多かれ少なかれ言うことができる。しかしたとえば都市の労働は、自然を克服することに大きな目的が置かれている。工場は自然の変化にかかわりなくつねに一定の温度と一定の湿度のもとで動かされなければならない。人々は夏でも冬でも同じように勤務しなければならない。

僕はそんな人間の生活が好きではない。木や草だって春には芽を出し、冬にはじっと静かな生活に入るではないか。山女や岩魚は春になるとエサを食べてふとり、夏には夏ヤセをして、秋には再びまるまると太り、冬には氷の下で細くなって暮している。熊や狸、すも秋には木の实を食べて体中に脂肪がつき、冬にはその脂肪を減らしながらゆっくり春の来るのを待つ。

そこには季節に合わせた一年のリズムがある。しかし人間にだけはそのリズムがない。一年中同じように働き、同じように生活しなければならない。それが僕には気に入らないのである。

それは自然の一員としてあるだけでなく、自然を克服することによってのみ生きることのできる人間にさすけられた宿命であるかにも見える。だが果してそうなのであろうか。

もちろん人間にそのような宿命のあることを僕も否定することはできない。しかしそのような側面が強まってきたのは、やはり近代以降の歴史においてであることも、また事実であるように思えるのである。

かつて我々はもつと一年のサイクルを利用して生きてきたのではなく、かたのたのたのた。春には春の仕事が、夏には夏の仕事が、そして冬にも秋にもそれに適した仕事と生活があった。そのリズムを崩してき

問3 ①しかしこの生産(労働)と生活の関係は、実際には根本的なところで逆になっているのではないかと思える。とありますが、どのような内容か、二十五字以上、三十五字以内で書きなさい。

労働は生活の手段だ

しかしこの生産労働と生活の関係は、逆になっている。

都市型生産のシステムを維持することに生活のリズムを合わせているのである

たのは、都市の労働と生活である。

都市の生産活動は、一年の自然条件の変化に左右されずに生産がつけられることを目的にしている。一年中変わらない生産活動―それに人々の生活も合わせられる。その結果人間の生活様式も一年中変わることはなくなる。たいていの都市の人々は、生活をつくるために労働をしているのだと考えているにちがいない。労働は生活の手段だ。

②しかしこの生産(労働)と生活の関係は、実際には根本的なところで逆になっているのではないかと思える。都市型生産のシステムを維持することに生活のリズムを合わせているのである。

もちろん山村の生活と労働の関係も、生活のリズムに合わせた労働であるといきれるわけではない。出荷にいいそがしい時期には、それに生活も規定される。しかし山里での生活と労働には四季があり、そしてそのいいそがしい時期をどのようにいそがしくするかどうかは村人個人の判断である。なめこの出荷価格が上がったとしても、別にいいのでなめこを出荷しなくてもかまわない。村人は今日はこのくらい労働をしようというように、自分の労働量を自分で決めることができる。

いそがしい自分が、自分の能動的判断にもとづいて実現する。外から強制されてはいない。自分の労働時間と労働密度を自分でコントロールする。非労働時間―生活時間をどれくらいにするかも自分で決定する。人々は自分の生活のあり方をも自分で決めているといえるのである。

そのうえ労働は直接自分の生活の創造にはわかえってくる。畑仕事に精を出すことは、そのまま自分の生活で消費するものをつくっていくこと、すなわち生活そのものである。浜平の宿でつくっている茸は、ほとんどが自家消費分である。ということは茸をつくる労働自身が生活なのである。

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

山里での労働は多くが自然条件を利用したものである。畑でも雑草栽培でも、山村の条件を生かすことなしにはなりたない。もちろんそのことは山村以外のすべての労働にも多かれ少なかれ言うことができる。しかしたとえば都市の労働は、自然を克服することに大きな目的が置かれている。工場は自然の変化にかかわりなくつねに一定の温度と一定の湿度のもとで動かされなければならない。人々は夏でも冬でも同じように勤務しなければならない。

僕はそのような人間の生活が好きではない。木や草だって春には芽を出し、冬にはじっと静かな生活に入るではないか。山女や岩魚は春になるとエサを食べてふとり、夏には夏やせをして、秋には再びまるまると太り、冬には氷の下で細くなって暮している。熊や狸、すも秋には木の実を食べて体中に脂肪がつき、冬にはその脂肪を減らしながらゆっくり春の来るのを待つ。

そこには節に合わせた一年のリズムがある。しかし人間にだけはそのリズムがない。一年中同じように働き、同じように生活しなければならない。それが僕には気に入らないのである。

それは自然の一員としてあるだけでなく、自然を克服することによってのみ生きることのできる人間にさすけられた宿命であるかにも見える。だが果してそうなのであろうか。

もちろん人間にそのような宿命のあることを僕も否定することはできない。しかしそのような側面が強まってきたのは、やはり近代以降の歴史においてであることも、また事実であるように思えるのである。

かつて我々はもつと一年のサイクルを利用して生きてきたのではなく、かたのたのたのた。春には春の仕事が、夏には夏の仕事が、そして冬にも秋にもそれに適した仕事と生活があった。そのリズムを崩してき

問3 ①しかしこの生産(労働)と生活の関係は、実際には根本的なところで逆になっているのではないかと思える。とありますが、どのような内容か、二十五字以上、三十五字以内で書きなさい。

労働は生活の手段だ

しかしこの生産労働と生活の関係は、逆になっている。

つまり

都市型生産のシステムを維持することに生活のリズムを合わせているのである

たのは、都市の労働と生活である。

都市の生産活動は、一年の自然条件の変化に左右されずに生産がつけられることを目的にしている。一年中変わらない生産活動―それに人々の生活も合わせられる。その結果人間の生活様式も一年中変わることはなくなる。たいていの都市の人々は、生活をつくるために労働をしているのだと考えているにちがいない。労働は生活の手段だ。

②しかしこの生産(労働)と生活の関係は、実際には根本的なところで逆になっているのではないかと思える。都市型生産のシステムを維持することに生活のリズムを合わせているのである。

もちろん山村の生活と労働の関係も、生活のリズムに合わせた労働であるといえるわけではない。出荷にいいそがしい時期には、それに生活も規定される。しかし山里での生活と労働には四季があり、そしてそのいいそがしい時期をどのようにいそがしくするかどうかは村人個人の判断である。なめこの出荷価格が上がったとしても、別にいいでなめこを出荷しなくてもかまわない。村人は今日はこのくらい労働をしようというように、自分の労働量を自分で決めることができる。

いそがしい自身が、自分の能動的判断にもとづいて実現する。外から強制されてはいない。自分の労働時間と労働密度を自分でコントロールする。非労働時間―生活時間をどれくらいにするかも自分で決定する。人々は自分の生活のあり方をも自分で決めているといえるのである。

そのうえ労働は直接自分の生活の創造にはわかれなくてくる。畑仕事に精を出すことは、そのまま自分の生活で消費するものをつくっていくこと、すなわち生活そのものである。浜平の宿でつくっている葺は、ほとんどが自家消費分である。ということは葺をつくる労働自身が生活なのである。

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

山里での労働は多くが自然条件を利用したものである。畑でも雑草栽培でも、山村の条件を生かすことなしにはなりたない。もちろんそのことは山村以外のすべての労働にも多かれ少なかれ言うことができる。しかしたとえば都市の労働は、自然を克服することに大きな目的が置かれている。工場は自然の変化にかかわりなくつねに一定の温度と一定の湿度のもとで動かされなければならない。人々は夏でも冬でも同じように勤務しなければならない。

僕はそんな人間の生活が好きではない。木や草だって春には芽を出し、冬にはじっと静かな生活に入るではないか。山女や岩魚は春になるとエサを食べてふとり、夏には夏ヤセをして、秋には再びまるまると太り、冬には氷の下で細くなって暮している。熊やり、すも秋には木の実を食べて体中に脂肪がつき、冬にはその脂肪を減らしながらゆっくり春の来るのを待つ。

そこには節に合わせた一年のリズムがある。しかし人間にだけはそのリズムがない。一年中同じように働き、同じように生活しなければならない。それが僕には気に入らないのである。

それは自然の一員としてあるだけでなく、自然を克服することによってのみ生きることのできる人間にさすけられた宿命であるかにも見える。だが果たしてそうなのであろうか。

もちろん人間にそのような宿命のあることを僕も否定することはできない。しかしそのような側面が強まってきたのは、やはり近代以降の歴史においてであることも、また事実であるように思えるのである。

かつて我々はもつと一年のサイクルを利用して生きてきたのではなく、かたのたのたのた。春には春の仕事が、夏には夏の仕事が、そして冬にも秋にもそれに適した仕事と生活があった。そのリズムを崩してき

問3 ① しかしこの生産(労働)と生活の関係は、実際には根本的なところで逆になっているのではないかと思える。とありますが、どのようなことになっているのですか。次の空欄にあてはまる内容を、二十五字以上、三十五字以内で書きなさい。

労働は生活の手段だ

しかしこの生産労働と生活の関係は、逆になっている。

しまろ

「都市型生産のシステムを維持すること」「生活のリズム」を合わせているのである

たのは、都市の労働と生活である。

都市の生産活動は、一年の自然条件の変化に左右されずに生産がつけられることを目的にしている。一年中変わらない生産活動―それに人々の生活も合わせられる。その結果人間の生活様式も一年中変わることはなくなる。たいていの都市の人々は、生活をつくるために労働をしているのだと考えているにちがいない。労働は生活の手段だ。

④ しかしこの生産(労働)と生活の関係は、実際には根本的なところで逆になっているのではないかと思える。都市型生産のシステムを維持することに生活のリズムを合わせているのである。

もちろん山村の生活と労働の関係も、生活のリズムに合わせた労働であるといきれるわけではない。出荷にいいそがしい時期には、それに生活も規定される。しかし山里での生活と労働には四季があり、そしてそのいいそがしい時期をどのようにいそがしくするかどうかは村人個人の判断である。なめこの出荷価格が上がったとしても、別にいいでなめこを出荷しなくてもかまわない。村人は今日はこのくらいの労働をしようというように、自分の労働量を自分で決めることができる。

いそがしい自身が、自分の能動的判断にもとづいて実現する。外から強制されてはいない。自分の労働時間と労働密度を自分でコントロールする。非労働時間―生活時間をどれくらいにするかも自分で決定する。人々は自分の生活のあり方をも自分で決めているといえるのである。

そのうえ労働は直接自分の生活の創造にはわかえってくる。畑仕事に精を出すことは、そのまま自分の生活で消費するものをつくっていくこと、すなわち生活そのものである。浜平の宿でつくっている茸は、ほとんどが自家消費分である。ということは茸をつくる労働自身が生活なのである。

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

山里での労働は多くが自然条件を利用したものである。畑でも雑草栽培でも、山村の条件を生かすことなしにはなりたたない。もちろんそのことは山村以外のすべての労働にも多かれ少なかれ言うことができる。しかしたとえば都市の労働は、自然を克服することに大きな目的が置かれている。工場は自然の変化にかかわりなくつねに一定の温度と一定の湿度のもとで動かされなければならない。人々は夏でも冬でも同じように勤務しなければならない。

僕はそんな人間の生活が好きではない。木や草だって春には芽を出し、冬にはじっと静かな生活に入るではないか。山女や岩魚は春になるとエサを食べてふとり、夏には夏ヤセをして、秋には再びまるまると太り、冬には氷の下で細くなって暮している。熊やり、すも秋には木の実を食べて体中に脂肪がつき、冬にはその脂肪を減らしながらゆっくり春の来るのを待つ。

そこには節に合わせた一年のリズムがある。しかし人間にだけはそのリズムがない。一年中同じように働き、同じように生活しなければならない。それが僕には気に入らないのである。

それは自然の一員としてあるだけでなく、自然を克服することによってのみ生きることのできる人間にさすけられた宿命であるかにも見える。だが果してそうなのであろうか。

もちろん人間にそのような宿命のあることを僕も否定することはできない。しかしそのような側面が強まってきたのは、やはり近代以降の歴史においてであることも、また事実であるように思えるのである。

かつて我々はもつと一年のサイクルを利用して生きてきたのではなく、かたのたのたのた。春には春の仕事が、夏には夏の仕事が、そして冬にも秋にもそれに適した仕事と生活があった。そのリズムを崩してき

問3 ①しかしこの生産(労働)と生活の関係は、実際には根本的なところで逆になっているのではないかと思える。とありますが、どのような内容か、二十五字以上、三十五字以内で書きなさい。

たのは、都市の労働と生活である。

都市の生産活動は、一年の自然条件の変化に左右されずに生産がつけられることを目的にしている。一年中変わらない生産活動―それに人々の生活も合わせられる。その結果人間の生活様式も一年中変わることはなくなる。たいていの都市の人々は、生活をつくるために労働をしているのだと考えているにちがいない。労働は生活の手段だ。

②しかしこの生産(労働)と生活の関係は、実際には根本的なところで逆になっているのではないかと思える。都市型生産のシステムを維持することに生活のリズムを合わせているのである。

もちろん山村の生活と労働の関係も、生活のリズムに合わせた労働であるといきれるわけではない。出荷にいいそがしい時期には、それに生活も規定される。しかし山里での生活と労働には四季があり、そしてそのいいそがしい時期をどのようにいいそがしくするかは村人個人の判断である。なめこの出荷価格が上がったとしても、別にいいのでなめこを出荷しなくてもかまわない。村人は今日はこのくらい労働をしようというように、自分の労働量を自分で決めることができる。

いそがしい自身が、自分の能動的判断にもとづいて実現する。外から強制されてはいない。自分の労働時間と労働密度を自分でコントロールする。非労働時間―生活時間をどれぐらいにするかも自分で決定する。人々は自分の生活のあり方をも自分で決めているといえるのである。

そのうえ労働は直接自分の生活の創造にはわかえってくる。畑仕事に精を出すことは、そのまま自分の生活で消費するものをつくっていくこと、すなわち生活そのものである。浜平の宿でつくっている茸は、ほとんどが自家消費分である。ということは茸をつくる労働自身が生活なのである。

労働は生活の手段だ

しかしこの生産労働と生活の関係は、逆になっている。

つまり

労働

「都市型生産のシステムを維持する」と「生活のリズム」を合わせているのである

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

山里での労働は多くが自然条件を利用したものである。畑でも雑草栽培でも、山村の条件を生かすことなしにはなりたない。もちろんそのことは山村以外のすべての労働にも多かれ少なかれ言うことができる。しかしたとえば都市の労働は、自然を克服することに大きな目的が置かれている。工場は自然の変化にかかわりなくつねに一定の温度と一定の湿度のもとで動かされなければならない。人々は夏でも冬でも同じように勤務しなければならない。

僕はそんな人間の生活が好きではない。木や草だって春には芽を出し、冬にはじっと静かな生活に入るではないか。山女や岩魚は春になるとエサを食べてふとり、夏には夏ヤセをして、秋には再びまるまると太り、冬には氷の下で細くなって暮している。熊や狸、すも秋には木の实を食べて体中に脂肪がつき、冬にはその脂肪を減らしながらゆっくり春の来るのを待つ。

そこには節に合わせた一年のリズムがある。しかし人間にだけはそのリズムがない。一年中同じように働き、同じように生活しなければならない。それが僕には気に入らないのである。

それは自然の一員としてあるだけでなく、自然を克服することによってのみ生きることのできる人間にさすけられた宿命であるかみえ

たのは、都市の労働と生活である。

都市の生産活動は、一年の自然条件の変化に左右されずに生産がつけられることを目的にしている。一年中変わらない生産活動―それに人々の生活も合わせられる。その結果人間の生活様式も一年中変わることはなくなる。たいいていの都市の人々は、生活をつくるために労働をしているのだと考えているにちがいない。労働は生活の手段だ。

しかしこの生産(労働)と生活の関係は、実際には根本的などころで逆になっているのではないかと思える。都市型生産のシステムを維持することに生活のリズムを合わせているのである。

もちろん山村の生活と労働の関係も、生活のリズムに合わせた労働であるといきれるわけではない。出荷にいいそがしい時期には、それに生活も規定される。しかし山里での生活と労働には四季があり、そしてそのいいそがしい時期をどのようにいそがしくするかどうかは村人個人の判断である。なめこの出荷価格が上がったとしても、別にいいでなめこを出荷しなくてもかまわない。村人は今日はこのくらい労働をしようというように、自分の労働量を自分で決めることができる。

いそがしい自身が、自分の能動的判断にもとづいて実現する。外から強制されてはいない。自分の労働時間と労働密度を自分でコントロールする。非労働時間―生活時間をどれくらいにするかも自分で決定

	生産(労働)は	生活の手段なのに、労働に
	生活のリズムを合わせるように	
35	なっている。	

(仕事) については、
生

労働は生活の手段なのに

しかしこの生産労働と生活の関係は、逆になっている。

つまり

労働

「都市型生産のシステムを維持する」と「生活のリズム」を合わせているのである

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

山里での労働は多くが自然条件を利用したものである。畑でも雑草栽培でも、山村の条件を生かすことなしにはなりたない。もちろんそのことは山村以外のすべての労働にも多かれ少なかれ言うことができる。しかしたとえば都市の労働は、自然を克服することに大きな目的が置かれている。工場は自然の変化にかかわりなくつねに一定の温度と一定の湿度のもとで動かされなければならない。人々は夏でも冬でも同じように勤務しなければならない。

僕はそのような人間の生活が好きではない。木や草だって春には芽を出し、冬にはじっと静かな生活に入るではないか。山女や岩魚は春になるとエサを食べてふとり、夏には夏やせをして、秋には再びまるまると太り、冬には氷の下で細くなって暮している。熊や、すも秋には木の实を食べて体中に脂肪がつき、冬にはその脂肪を減らしながらゆっくり春の来るのを待つ。

そこには季節に合わせた一年のリズムがある。しかし人間にだけはそのリズムがない。一年中同じように働き、同じように生活しなければならない。それが僕には気に入らないのである。

それは自然の一員としてあるだけでなく、自然を克服することによってのみ生きることのできる人間にさすけられた宿命であるかみに見える。だが果してそうなのであるか。

もちろん人間にそのような宿命のあることを僕も否定することはできない。しかしそのような側面が強まってきたのは、やはり近代以降の歴史においてであることも、また事実であるように思えるのである。

かつて我々はもつと一年のサイクルを利用して生きてきたのではなく、かたののだろうか。春には春の仕事が、夏には夏の仕事が、そして冬にも秋にもそれに適した仕事と生活があった。そのリズムを崩してき

たのは、都市の労働と生活である。

都市の生産活動は、一年の自然条件の変化に左右されずに生産がつけられることを目的にしている。一年中変わらない生産活動―それに人々の生活も合わせられる。その結果人間の生活様式も一年中変わらないこととなる。たいていの都市の人々は、生活をつくるために労働をしているのだと考えているにちがいない。労働は生活の手段だ。

しかしこの生産(労働)と生活の関係は、実際には根本的などころで逆になっているのではないかと思える。都市型生産のシステムを維持することに生活のリズムを合わせているのである。

もちろん山村の生活と労働の関係も、生活のリズムに合わせた労働であるといえるわけではない。出荷にいいそがしい時期には、それに生活も規定される。しかし山里での生活と労働には四季があり、そしてそのいいそがしい時期をどのようにいそがしくするかどうかは村人個人の判断である。なめこの出荷価格が上がったとしても、別にいいでなめこを出荷しなくてもかまわない。村人は今日はこのくらい労働をしようというように、自分の労働量を自分で決めることができる。

いそがしさ自身が、自分の能動的判断にもとづいて実現する。外から強制されてはいない。自分の労働時間と労働密度を自分でコントロールする。非労働時間―生活時間をどれくらいにするかも自分で決める。人々は自分の生活のあり方をも自分で決めているといえるのである。

そのうえ労働は直接自分の生活の創造にはわかえってくる。畑仕事に精を出すことは、そのまま自分の生活で消費するものをつくっていくこと、すなわち生活そのものである。浜平の宿でつくっている葺は、ほとんどが自家消費分である。ということは葺をつくる労働自身が生活なのである。

問4 なめこの出荷価格が……出荷しなくてもかまわない。とありま

すが、それはなぜですか。次の空欄にあてはまる言葉を本文中から探し、九字で書き抜きなさい。

山里では、自分の労働時間と労働密度を

どれくらいにするかを、村人自身が決めているから。

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

山里での労働は多くが自然条件を利用したものである。畑でも雑草栽培でも、山村の条件を生かすことなしにはなりたない。もちろんそのことは山村以外のすべての労働にも多かれ少なかれ言うことができる。しかしたとえば都市の労働は、自然を克服することに大きな目的が置かれている。工場は自然の変化にかかわりなくつねに一定の温度と一定の湿度のもとで動かされなければならない。人々は夏でも冬でも同じように勤務しなければならない。

僕はそのような人間の生活が好きではない。木や草だって春には芽を出し、冬にはじつと静かな生活に入るではないか。山女や岩魚は春になるとエサを食べてふとり、夏には夏ヤセをして、秋には再びまるまると太り、冬には氷の下で細くなって暮している。熊や、すも秋には木の实を食べて体中に脂肪がつき、冬にはその脂肪を減らしながらゆっくり春の来るのを待つ。

そこには節に合わせた一年のリズムがある。しかし人間にだけはそのリズムがない。一年中同じように働き、同じように生活しなければならない。それが僕には気に入らないのである。

それは自然の一員としてあるだけでなく、自然を克服することによってのみ生きることのできる人間にさすけられた宿命であるかにも見える。だが果してそうなのであろうか。

もちろん人間にそのような宿命のあることを僕も否定することはできない。しかしそのような側面が強まってきたのは、やはり近代以降の歴史においてであることも、また事実であるように思えるのである。

かつて我々は何もつと一年のサイクルを利用して生きてきたのではなく、秋に秋にそれぞれに適した仕事と生活があった。そのリズムを崩してき

問5 労働と生活の間に都市のような明瞭な区別がない。とありますが、その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 都市では労働と生活は別だが、山里では自分で労働量を決め、消費するものを自らつくり、労働と生活が一体化している。
- イ 都市では労働時間が一定だが、山里では生産性を上げるため長時間労働になり、生活の時間と労働の時間を分けられない。
- ウ 都市では決められたものを生産するが、山里ではつくりたいものを自由につくるため、創造と労働の境界があいまいである。
- エ 都市では雇い主と労働者とが雇用関係にあるが、山里では家族全員が働くために雇用関係が成立しない。

労働と生活の間に都市のような明瞭な区別がない。

たのは、都市の労働と生活である。

都市の生産活動は、一年の自然条件の変化に左右されずに生産がつけられることを目的にしている。一年中変わらない生産活動―それには人々の生活も合わせられる。その結果人間の生活様式も一年中変わることはなくなる。たいていの都市の人々は、生活をつくるために労働をしているのだと考えているにちがいない。労働は生活の手段だ。しかしこの生産(労働)と生活の関係は、実際には根本的などころで逆になっているのではないかと思える。都市型生産のシステムを維持することに生活のリズムを合わせているのである。

もちろん山村の生活と労働の関係も、生活のリズムに合わせた労働であるといきれるわけではない。出荷にいいそがしい時期には、それに生活も規定される。しかし山里での生活と労働には四季があり、そしてそのいいそがしい時期をどのようにいそがしくするかどうかは村人個人の判断である。なめこの出荷価格が上がったとしても、別にいいのでなめこを出荷しなくてもかまわない。村人は今日はこのくらい労働をしようというように、自分の労働量を自分で決めることができる。

いそがしい自身が、自分の能動的判断にもとづいて実現する。外から強制されてはいない。自分の労働時間と労働密度を自分でコントロールする。非労働時間―生活時間をどれぐらにするかも自分で決める。人々は自分の生活のあり方をも自分で決めているといえるのである。

そのうえ労働は直接自分の生活の創造にはわかえってくる。畑仕事に精を出すことは、そのまま自分の生活で消費するものをつくっていくこと、すなわち生活そのものである。浜平の宿でつくっている葺は、ほとんどが自家消費分である。ということは葺をつくる労働自身が生活なのである。

労働と生活の間に都市のような明瞭な区別がない。労働の密度が濃くなることは、一面では生活の密度が濃くなることと同義語である。

そして労働の密度も、自然条件との関係のなかで、自然条件を利用しながら決定される。一年の生活と労働の四季がそこにあらわれる。

「労働と生活の間に都市のような明瞭な区別がない。」

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

山里での労働は多くが自然条件を利用したものである。畑でも雑草栽培でも、山村の条件を生かすことなしにはなりたない。もちろんそのことは山村以外のすべての労働にも多かれ少なかれ言うことができる。しかしたとえば都市の労働は、自然を克服することに大きな目的が置かれている。工場は自然の変化にかかわりなくつねに一定の温度と一定の湿度のもとで動かされなければならない。人々は夏でも冬でも同じように勤務しなければならない。

僕はそのような人間の生活が好きではない。木や草だって春には芽を出し、冬にはじつと静かな生活に入るではないか。山女や岩魚は春になるとエサを食べてふとり、夏には夏ヤセをして、秋には再びまるまると太り、冬には氷の下で細くなって暮している。熊や狸、すも秋には木の实を食べて体中に脂肪がつき、冬にはその脂肪を減らしながらゆっくり春の来るのを待つ。

そこには節に合わせた一年のリズムがある。しかし人間にだけはそのリズムがない。一年中同じように働き、同じように生活しなければならない。それが僕には気に入らないのである。

それは自然の一員としてあるだけでなく、自然を克服することによってのみ生きることのできる人間にさすけられた宿命であるかにも見える。だが果してそうなのであるか。

もちろん人間にそのような宿命のあることを僕も否定することはできない。しかしそのような側面が強まってきたのは、やはり近代以降の歴史においてであることも、また事実であるように思えるのである。

かつて我々は何もつと一年のサイクルを利用して生きてきたのではなく、**そのリズムを崩してき**にも秋にもそれに適した仕事と生活があった。

問5 労働と生活の間に都市のような明瞭な区別がない。とありますが、その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 都市では労働と生活は別だが、山里では自分で労働量を決め、消費するものを自らつくり、労働と生活が一体化している。
- イ 都市では労働時間が一定だが、山里では生産性を上げるため長時間労働になり、生活の時間と労働の時間を分けられない。
- ウ 都市では決められたものを生産するが、山里ではつくりたいものを自由につくるため、創造と労働の境界があいまいである。
- エ 都市では雇い主と労働者とが雇用関係にあるが、山里では家族全員が働くために雇用関係が成立しない。

(山里は) 労働と生活の間に都市のような明瞭な区別がない。

たのは、都市の労働と生活である。

都市の生産活動は、一年の自然条件の変化に左右されずに生産がつけられることを目的にしている。一年中変わらない生産活動―それ人々の生活も合わせられる。その結果人間の生活様式も一年中変わらないこととなる。たいていの都市の人々は、生活をつくるために労働をしているのだと考えているにちがいない。労働は生活の手段だ。

しかしこの生産(労働)と生活の関係は、実際には根本的などころで逆になっているのではないかと思える。都市型生産のシステムを維持することに生活のリズムを合わせているのである。

もちろん山村の生活と労働の関係も、生活のリズムに合わせた労働であるといきれるわけではない。出荷にいいそがしい時期には、それに生活も規定される。しかし山里での生活と労働には四季があり、そしてそのいいそがしい時期をどのようにいそがしくするかどうかは村人個人の判断である。なめこの出荷価格が上がったとしても、別にいいのでなめこを出荷しなくてもかまわない。村人は今日はこのくらい労働をしようというように、自分の労働量を自分で決めることができる。

いそがしい自身が、自分の能動的判断にもとづいて実現する。外から強制されてはいない。自分の労働時間と労働密度を自分でコントロールする。非労働時間―生活時間をどれぐらにするかも自分で決める。人々は自分の生活のあり方をも自分で決めているといえるのである。

そのうえ労働は直接自分の生活の創造にはわかえってくる。畑仕事に精を出すことは、そのまま自分の生活で消費するものをつくっていくこと、すなわち生活そのものである。浜平の宿でつくっている葺は、ほとんどが自家消費分である。ということは葺をつくる労働自身が生活なのである。

労働と生活の間に都市のような明瞭な区別がない。労働の密度が濃くなることは、一面では生活の密度が濃くなることと同義語である。

そして労働の密度も、自然条件との関係のなかで、自然条件を利用しながら決定される。一年の生活と労働の四季がそこにあらわれる。

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

山里での労働は多くが自然条件を利用したものである。畑でも雑草栽培でも、山村の条件を生かすことなしにはなりたない。もちろんそのことは山村以外のすべての労働にも多かれ少なかれ言うことができる。しかしたとえば都市の労働は、自然を克服することに大きな目的が置かれている。工場は自然の変化にかかわりなくつねに一定の温度と一定の湿度のもとで動かされなければならない。人々は夏でも冬でも同じように勤務しなければならない。

僕はそのような人間の生活が好きではない。木や草だって春には芽を出し、冬にはじつと静かな生活に入るではないか。山女や岩魚は春になるとエサを食べてふとり、夏には夏ヤセをして、秋には再びまるまると太り、冬には氷の下で細くなって暮している。熊や猪、秋には木の实を食べて体中に脂肪がつき、冬にはその脂肪を減らしながらゆっくり春の来るのを待つ。

そこには節に合わせた一年のリズムがある。しかし人間にだけはそのリズムがない。一年中同じように働き、同じように生活しなければならない。それが僕には気にくわいのである。

それは自然の一員としてあるだけでなく、自然を克服することによってのみ生きることのできる人間にさすけられた宿命であるかにも見える。だが果してそうなのであろうか。

もちろん人間にそのような宿命のあることを僕も否定することはできない。しかしそのような側面が強まってきたのは、やはり近代以降の歴史においてであることも、また事実であるように思えるのである。

かつて我々は何もつと一年のサイクルを利用して生きてきたのではなく、春には春の仕事を、夏には夏の仕事を、そして冬にも秋にもそれに適した仕事と生活があった。そのリズムを崩してき

問5 労働と生活の間に都市のような明瞭な区別がない。とありますが、その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 都市では労働と生活は別だが、山里では自分で労働量を決め、消費するものを自らつくり、労働と生活が一体化している。
- イ 都市では労働時間が一定だが、山里では生産性を上げるため長時間労働になり、生活の時間と労働の時間を分けられない。
- ウ 都市では決められたものを生産するが、山里ではつくりたいものを自由につくるため、創造と労働の境界があいまいである。
- エ 都市では雇い主と労働者とが雇用関係にあるが、山里では家族全員が働くために雇用関係が成立しない。

(山里は) 労働と生活の間に都市のような明瞭な区別がない。

都市・・・生活と労働に明瞭な区別がある
山里・・・生活と労働に明瞭な区別がない

たのは、都市の労働と生活である。

都市の生産活動は、一年の自然条件の変化に左右されずに生産がつけられることを目的にしている。一年中変わらない生産活動―それの人々の生活も合わせられる。その結果人間の生活様式も一年中変わることはなくなる。たいていの都市の人々は、生活をつくるために労働をしているのだと考えているにちがいない。労働は生活の手段だ。

しかしこの生産(労働)と生活の関係は、実際には根本的などころで逆になっているのではないかと思える。都市型生産のシステムを維持することに生活のリズムを合わせているのである。

もちろん山村の生活と労働の関係も、生活のリズムに合わせた労働であるといきれるわけではない。出荷にいいそがしい時期には、それに生活も規定される。しかし山里での生活と労働には四季があり、そしてそのいいそがしい時期をどのようにいそがしくするかどうかは村人個人の判断である。なめこの出荷価格が上がったとしても、別にいいでなめこを出荷しなくてもかまわない。村人は今日はこのくらいの労働をしようというように、自分の労働量を自分で決めることができる。

いそがしい自身が、自分の能動的判断にもとづいて実現する。外から強制されてはいない。自分の労働時間と労働密度を自分でコントロールする。非労働時間―生活時間をどれぐらにするかも自分で決める。人々は自分の生活のあり方をも自分で決めているといえるのである。

そのうえ労働は直接自分の生活の創造にはわかえってくる。畑仕事に精を出すことは、そのまま自分の生活で消費するものをつくっていくこと、すなわち生活そのものである。浜平の宿でつくっている葺は、ほとんどが自家消費分である。ということは葺をつくる労働自身が生活なのである。

労働と生活の間に都市のような明瞭な区別がない。労働の密度が濃くなることは、一面では生活の密度が濃くなることと同義語である。

そして労働の密度も、自然条件との関係のなかで、自然条件を利用しながら決定される。一年の生活と労働の四季がそこにあらわれる。

「これは『F・ジョージ』、2011年、111頁」

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

山里での労働は多くが自然条件を利用したものである。畑でも雑草栽培でも、山村の条件を生かすことなしにはなりたたない。もちろんそのことは山村以外のすべての労働にも多かれ少なかれ言うことができる。しかしたとえば都市の労働は、自然を克服することに大きな目的が置かれている。工場は自然の変化にかかわりなくつねに一定の温度と一定の湿度のもとで動かされなければならない。人々は夏でも冬でも同じように勤務しなければならない。

僕はそんな人間の生活が好きではない。木や草だって春には芽を出し、冬にはじつと静かな生活に入るではないか。山女や岩魚は春になるとエサを食べてふとり、夏には夏ヤセをして、秋には再びまるまると太り、冬には氷の下で細くなって暮している。熊やり、すも秋には木の実を食べて体中に脂肪がつき、冬にはその脂肪を減らしながらゆっくり春の来るのを待つ。

そこには節に合わせた一年のリズムがある。しかし人間にだけはそのリズムがない。一年中同じように働き、同じように生活しなければならない。それが僕には気に入らないのである。

それは自然の一員としてあるだけでなく、自然を克服することによってのみ生きることのできる人間にさすけられた宿命であるかにも見える。だが果してそうなのであろうか。

もちろん人間にそのような宿命のあることを僕も否定することはできない。しかしそのような側面が強まってきたのは、やはり近代以降の歴史においてであることも、また事実であるように思えるのである。

かつて我々は何もつと一年のサイクルを利用して生きてきたのではなく、かつたのだらうか。春には春の仕事が、夏には夏の仕事が、そして冬にも秋にもそれに適した仕事と生活があった。そのリズムを崩してき

問5 労働と生活の間に都市のような明瞭な区別がない。とありますが、その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 都市では労働と生活は別だが、山里では自分で労働量を決め、消費するものを自らつくり、労働と生活が一体化している。

イ 都市では労働時間が一定だが、山里では生産性を上げるため長時間労働になり、生活の時間と労働の時間を分けられない。

ウ 都市では決められたものを生産するが、山里ではつくりたいものを自由につくるため、創造と労働の境界があいまいである。

エ 都市では雇い主と労働者とが雇用関係にあるが、山里では家族全員が働くために雇用関係が成立しない。

(山里は) 労働と生活の間に都市のような明瞭な区別がない。

都市・・・生活と労働に明瞭な区別がある
山里・・・生活と労働に明瞭な区別がない

たのは、都市の労働と生活である。

都市の生産活動は、一年の自然条件の変化に左右されずに生産がつけられることを目的にしている。一年中変わらない生産活動―それの人々の生活も合わせられる。その結果人間の生活様式も一年中変わることはなくなる。たいていの都市の人々は、生活をつくるために労働をしているのだと考えているにちがいない。労働は生活の手段だ。しかしこの生産(労働)と生活の関係は、実際には根本的などころで逆になっているのではないかと思える。都市型生産のシステムを維持することに生活のリズムを合わせているのである。

もちろん山村の生活と労働の関係も、生活のリズムに合わせた労働であるといきれるわけではない。出荷にいいそがしい時期には、それに生活も規定される。しかし山里での生活と労働には四季があり、そしてそのいいそがしい時期をどのようにいそがしくするかどうかは村人個人の判断である。なめこの出荷価格が上がったとしても、別にいいのでなめこを出荷しなくてもかまわない。村人は今日はこのくらいの労働をしようというように、自分の労働量を自分で決めることができる。

いそがしい自身が、自分の能動的判断にもとづいて実現する。外から強制されてはいない。自分の労働時間と労働密度を自分でコントロールする。非労働時間―生活時間をどれぐらにするかも自分で決める。人々は自分の生活のあり方をも自分で決めているといえるのである。

そのうえ労働は直接自分の生活の創造にはねかえってくる。畑仕事に精を出すことは、そのまま自分の生活で消費するものをつくっていくこと、すなわち生活そのものである。浜平の宿でつくっている葺は、ほとんどが自家消費分である。ということは葺をつくる労働自身が生活なのである。

労働と生活の間に都市のような明瞭な区別がない。労働の密度が濃くなることは、一面では生活の密度が濃くなることと同義語である。

そして労働の密度も、自然条件との関係のなかで、自然条件を利用しながら決定される。一年の生活と労働の四季がそこにあらわれる。

「これは『F・ジョージ』、2011年、111頁」

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(……の左側は口語訳です。)

梅見にまかり歩きけるころ、東山にいと大きな桜のあるのを見て、
 ①花の頃はまたも訪ひ来んなど言ひたるを、この頃思ひ出でて、ひとり
 ②二人誘ひて尋ね行くに、心あての花咲きぬと見えて、山の半ばに雲の
 おりあたらんやうなり。分けのほりて見るに、半ば散り過ぎたり。盛
 ④りをこそ訪はめと思ひしをいとくちをし。ここを如意寺といふを聞き
 て、

我が思ふ心のごとき寺ならば風には花をまかせざらまし

(小沢巖庵著「六帖詠草」による。)

(注) ※如意……思いのまま、という意味。

問1 ①花の頃とありますが、これとほぼ同じ意味の言葉を本文中か
 ら探し、二字で書き抜きなさい。

問2 ②訪ひ来んとありますが、この意味として最も適切なものを、
 次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 訪ねて来よう イ 訪ねて来るだろうか
 ウ 訪ねては来ない エ 訪ねて来い

〔 〕

問3 咲きぬとありますが、この意味として最も適切なものを次の
 ア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 咲かないだろう
 イ まもなく咲くだろう
 ウ すでに咲いてしまった
 エ 咲くかどうかわからない

〔 〕

問4 ④おりあたらんとありますが、この部分を「現代仮名遣い」に
 直し、ひらがなで書きなさい。

問5 ⑤いとくちをし。とありますが、その理由にあたる部分を本文
 中から探し、十字以内で書き抜きなさい。

問6 次の「我が思ふ……」の和歌の意味を解釈したものです。空
 欄にあてはまる内容を、十五字以内で書きなさい。

15

風の花を散らせるようなことはしなかっただろうに。

3分

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(……の左側は口語訳です。)

梅見にまかり歩き^歩けるころ、東山にいと大きなる桜^がのあるのを見て、

歩き回っていた

とても

花の頃はまたも訪^訪ひ来^来んなど言ひたるを、この頃思ひ出^出でて、ひとり

二人誘^誘ひて尋ね行くに、心あての花咲きぬと見えて、山の半ばに雲の

おめあての

おりぬたらんやうなり。分けのほりて見るに、半ば散り過ぎたり。盛

りをこそ訪はめと思ひしをいとくちをし。ここを如意寺といふを聞き

て、

我が思ふ心のごとき寺ならば風には花をまかせざらまし

(小沢蘆庵著「六帖詠草」による。)

(注) ※如意……思いのまま、という意味。

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(……の左側は口語訳です。)

梅見にまかり歩き^歩けるころ、東山にいと大きなる桜^{さくら}のあるのを見て、

歩き回っていた

とても

が

①花の頃はまたも訪^まひ来^きんなど言^いひたるを、この頃思^{おも}ひ出^いでて、ひとり

②訪ひ来ん

思ひ出して

二人誘^{いざな}ひて尋^{たず}ね行くに、心あての花咲^{はな}きぬと見えて、山の半ばに雲の

おめあての

④

おりぬたらんやうなり。分けのほりて見るに、半ば散り過ぎたり。盛

りをこそ訪^まはめと思^{おも}ひしをいとくちをし。⑤ここを如意寺^{にぎよゐでら}といふを聞き

て、

我が思ふ心のごとき寺ならば風には花をまかせざらまし

(小沢蘆庵^{おざわあん}著「六帖詠草」による。)

(注) ※如意……思いのまま、という意味。

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(……の左側は口語訳です。)

梅見にまかり歩き^歩けるころ、東山にいと大きなる桜^{さくら}のあるのを見て、

歩き回っていた

とても

が

① 花の頃はまたも訪^まひ来^きんなど言^いひたるを、この頃思^{おも}ひ出^いでて、ひとり

② 訪ひ来ん

思ひ出して

二人誘^いひて尋^{たず}ね行くに、心あての花咲^{はな}きぬと見えて、山の半ばに雲の

誘って歩いて行くと

おめあての

④ おりぬたらんやうなり。分けのほりて見るに、半ば散り過ぎたり。盛

りをこそ訪^まはめと思^{おも}ひしをいとくちをし。⑤ ここを如意寺といふを聞き

⑤

※ 如意寺といふ

て、

我が思ふ心のごとき寺ならば風には花をまかせざらまし

(小沢蘆庵著「六帖詠草」による。)

(注) ※如意……思いのまま、という意味。

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(……の左側は口語訳です。)

梅見にまかり歩き^かけるころ、東山にいと大きなる桜^がのあるのを見て、

歩き回っていた

とても

が

① 花の頃はまたも訪^まひ来^きんなど言^いひたるを、この頃思^{おも}ひ出^いでて、ひとり

② 訪ひ来ん

思い出して

誘^いつて歩^あいて行くと

が

が

二人誘^いひて尋^たね行くに、心あての花咲^{はな}きぬと見^みえて、山の半ばに雲^の

おめあての

桜が

④ おりぬたらんやうなり。分けのほりて見るに、半ば散^ちり過ぎたり。盛

りをこそ訪^まはめと思^{おも}ひしをいとくちをし。⑤ ここを如意寺といふを聞き

残念だ

※ 如意寺

て、

我が思ふ心のごとき寺ならば風には花をまかせざらまし

(小沢蘆庵著「六帖詠草」による。)

(注) ※如意……思いのまま、という意味。

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(……の左側は口語訳です。)

梅見にまかり歩き^{あひ}けるころ、東山にいと大きな^{とても}桜~~が~~のあるのを見て、

①「花の頃はまたも訪^まひ来^こんなど言^いひたるを、この頃思^{おも}ひ出^いでて、ひとり

誘^よつて歩^あひて行^いくと

二人誘^よひて尋^たね行^いくに、心あての花咲^{はな}きぬと見^みえて、山の半ばに雲の

おめあての

④おりあたらんやうなり。分けのぼりて見るに、半ば散^ちり過ぎたり。「盛

りをこそ訪^まひはめと思^{おも}ひしをいとくちをし。ここを如^{ごと}く如意^い寺^じといふを聞き

て、

我が思^{おも}ふ心のごとき寺ならば風には花をまかせ^{まかせ}せざらまし

(小沢蘆庵著「六帖詠草」による。)

(注) ※如意……思いのまま、という意味。

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(……の左側は口語訳です。)

歩き回っていた

とても

が

梅見にまかり歩きけるころ、東山にいと大きな桜のあるのを見て、

①

②

③

④

「花の頃はまたも訪ひ来んなど言ひたるを、この頃思ひ出でて、ひとり

誘つて歩いて行くと

「が

が

二人誘ひて尋ね行くに、心あての花咲きぬと見えて、山の半ばに雲の

おめあての

⑤

「桜が

おりあたらんやうなり。分けのぼりて見るに、半ば散り過ぎたり。「盛

⑥

⑦

りをこそ訪はめと思ひしをいとくちをし。ここを如意寺といふを聞き

て、

我が思ふ心のごとき寺ならば風には花をまかせさらまし
まかせなかつただらう

問1 花の頃とありますが、これとほぼ同じ意味の言葉を本文中から探し、二字で書き抜きなさい。

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(……の左側は口語訳です。)

歩き回っていた

梅見にまかり歩きけるころ、東山にいと大きな榎とてのあるのを見て、

「花の頃はまたも訪ひ来んなど言ひたるを」

この頃思ひ出でて、ひとり

誘つて歩いて行くと

二人誘ひて尋ね行くに、心あての花咲きぬと見えて、山の半ばに雲の

おめあての

おりあたらんやうなり。分けのぼりて見るに、半ば散り過ぎたり。盛

りをこそ訪はめと思ひしをいとくちをし。

ここを如意寺といふを聞き

て、

我が思ふ心のごとき寺ならば風には花をまかせさらまし

問1 花の頃①とありますが、これとほぼ同じ意味の言葉を本文中か

ら探し、二字で書き抜きなさい。

--

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(……の左側は口語訳です。)

歩き回っていた

梅見にまかり歩きけるころ、東山にいと大きな榎とつてものあるのを見て、

花の頃はまたも訪ひ来んなど言ひたるを

この頃思ひ出でて、ひとり

誘つて歩いて行くと

二人誘ひて尋ね行くに、心あての花咲きぬと見えて、山の半ばに雲の

おめあての

おりあたらんやうなり。分けのぼりて見るに、半ば散り過ぎたり。盛

りをこそ訪はめと思ひしをいとくちをし。

ここを如意寺といふを聞き

て、

我が思ふ心のごとき寺ならば風には花をまかせざらまし
まかせなかつただらう

問1 花の頃①とありますが、これとほぼ同じ意味の言葉を本文中から探し、二字で書き抜きなさい。

盛
り

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(……の左側は口語訳です。)

歩き回っていた

梅見にまかり歩きけるころ、東山にいと大きな榎とつてものあるのを見て、

花の頃はまたも訪ひ来んなど言ひたるを

この頃思ひ出でて、ひとり

誘つて歩いて行くと

二人誘ひて尋ね行くに、心あての花咲きぬと見えて、山の半ばに雲の

おめあての

おりあたらんやうなり。分けのぼりて見るに、半ば散り過ぎたり。盛

りをこそ訪はめと思ひしをいとくちをし。

ここを如意寺といふを聞き

残念だ

思いのまま

て、

我が思ふ心のごとき寺ならば風には花をまかせさらまし
まかせなかつただらう

問2 訪ひ来ん とありますが、この意味として最も適切なものを、

次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 訪ねて来よう

イ 訪ねて来るだろうか

ウ 訪ねては来ない

エ 訪ねて来い

〔 〕

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(……の左側は口語訳です。)

歩き回っていた

梅見にまかり歩きけるころ、東山にいと大きな榎とつてものあるのを見て、

花の頃はまたも訪ひ来んなど言ひたるを

この頃思ひ出でて、ひとり

誘つて歩いて行くと

二人誘ひて尋ね行くに、心あての花咲きぬと見えて、山の半ばに雲の

④ たなびいている

おめあての

おりあたらんやうなり。分けのぼりて見るに、半ば散り過ぎたり。盛

りをこそ訪はめと思ひしをいとくちをし。

ここを如意寺といふを聞き

て、

我が思ふ心のごとき寺ならば風には花をまかせさらまし

問3 咲きぬ とありますが、この意味として最も適切なものを次の

ア 咲かないだろう

イ まもなく咲くだろう

ウ すでに咲いてしまった

エ 咲くかどうかわからない

たなびく・・・雲や煙、霞などが、横に長く薄く広がってように漂っている様子

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(……の左側は口語訳です。)

歩き回っていた

梅見にまかり歩きけるころ、東山にいと大きな榎とつてものあるのを見て、

花の頃はまたも訪ひ来んなど言ひたるを

この頃思ひ出でて、ひとり

誘つて歩いて行くと

二人誘ひて尋ね行くに、心あての花咲きぬと見えて、山の半ばに雲の

④ たなびいている

おめあての

おりあたらんやうなり。分けのぼりて見るに、半ば散り過ぎたり。盛

りをこそ訪はめと思ひしをいとくちをし。

ここを如意寺といふを聞き

て、

我が思ふ心のごとき寺ならば風には花をまかせさらまし
まかせなかつただらう

問3 咲きぬ とありますが、この意味として最も適切なものを次の

ア〜エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 咲かないだらう

イ まもなく咲くだらう

ウ すでに咲いてしまった

エ 咲くかどうかわからない

たなびく・・・雲や煙、霞などが、横に長く薄く広がってように漂っている様子

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(……の左側は口語訳です。)

歩き回っていた

梅見にまかり歩きけるころ、東山にいと大きなる桜のあるのを見て、

とても

が

花の頃はまたも訪ひ来んなど言ひたるを

この頃思ひ出でて、ひとり

誘つて歩いて行くと

二人誘ひて尋ね行くに、心あての花咲きぬと見えて、山の半ばに雲の

④ たなびいている

おめあての

おりあたらんやうなり。分けのぼりて見るに、半ば散り過ぎたり。盛

りをこそ訪はめと思ひしをいとくちをし。

残念だ

ここを如意寺といふを聞き

て、

我が思ふ心のごとき寺ならば風には花をまかせさらまし

まかせなかつただろう

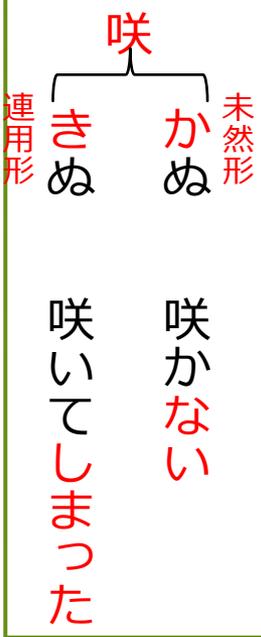
問3 咲きぬ とありますが、この意味として最も適切なものを次の

ア 咲かないだろう

イ まもなく咲くだろう

ウ **すでに咲いてしまった**

エ 咲くかどうかわからない



たなびく・・・雲や煙、霞などが、横に長く薄く広がってように漂っている様子

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(……の左側は口語訳です。)

歩き回っていた

梅見にまかり歩きけるころ、東山にいと大きな桜のあるのを見て、

とても

が

花の頃はまたも訪ひ来んなど言ひたるを

この頃思ひ出でて、ひとり

誘つて歩いて行くと

二人誘ひて尋ね行くに、心あての花咲きぬと見えて、山の半ばに雲の

④ たなびいてる

おめあての

おりあたらんやうなり。分けのぼりて見るに、半ば散り過ぎたり。

盛

⑤ りをこそ訪はめと思ひしをいとくちをし。

⑥ ここを如意寺といふを聞き

残念だ

思いのまま

て、

我が思ふ心のごとき寺ならば風には花をまかせざらまし

まかせなかつただろう

問5 ⑦ いとくちをし。とありますが、その理由にあたる部分を本文中から探し、十字以内で書き抜きなさい。

半	ば	散	り	た	る	を			
---	---	---	---	---	---	---	--	--	--

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(……の左側は口語訳です。)

歩き回っていた

とても

が

梅見にまかり歩きけるころ、東山にいと大きな榎のあるのを見て、

花の頃はまたも訪ひ来んなど言ひたるを

思い出して

この頃思ひ出でて、ひとり

誘つて歩いて行くと

「が」

二人誘ひて尋ね行くに、心あての花咲きぬと見えて、山の半ばに雲の

④ たなびいている

おめあての

「桜が」

おりあたらんやうなり。分けのぼりて見るに、半ば散り過ぎたり。盛

りをこそ訪はめと思ひしをいとくちをし。

⑤ 残念だ

悪いのまま

ここを如意寺といふを聞き

て、

我が思ふ心のごとき寺ならば風には花をまかせさらまし
まかせなかつただろう

問6 次の、「我が思ふ……」の和歌の意味を解釈したものです。空欄にあてはまる内容を、十五字以内で書きなさい。

15

風に花を散らせるようなことはしなかつただろうに。

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(……の左側は口語訳です。)

歩き回っていた

とても

が

梅見にまかり歩きけるころ、東山にいと大きな榎のあるのを見て、

花の頃はまたも訪ひ来んなど言ひたるを

この頃思ひ出でて、ひとり

誘つて歩いて行くと

二人誘ひて尋ね行くに、心あての花咲きぬと見えて、山の半ばに雲の

④ たなびいている

おめあての

桜が

おりあたらんやうなり。分けのぼりて見るに、半ば散り過ぎたり。盛

りをこそ訪はめと思ひしをいとくちをし。

ここを如意寺といふを聞き

て、

自分の思う心のような寺ならば

我が思ふ心のごとき寺ならば風には花をまかせさらまし

まかせなかつただろう

問6 次の「我が思ふ……」の和歌の意味を解釈したものです。空欄にあてはまる内容を、十五字以内で書きなさい。

15

風の花を散らせるようなことはしなかつただろうに。

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(……の左側は口語訳です。)

歩き回っていた

とても

が

梅見にまかり歩きけるころ、東山にいと大きな榎のあるのを見て、

花の頃はまたも訪ひ来んなど言ひたるを

この頃思ひ出でて、ひとり

誘つて歩いて行くと

二人誘ひて尋ね行くに、心あての花咲きぬと見えて、山の半ばに雲の

④ たなびいてる

おめあての

桜が

おりあたらんやうなり。分けのぼりて見るに、半ば散り過ぎたり。盛

りをこそ訪はめと思ひしをいとくちをし。

ここを如意寺といふを聞き

て、

自分の思う心のような寺ならば

我が思ふ心のごとき寺ならば風には花をまかせさらまし

まかせなかつただろう

問6 次は、「我が思ふ……」の和歌の意味を解釈したものです。空欄にあてはまる内容を、十五字以内で書きなさい。

自 分 の 思 い の ま ま に な る 寺 な ら

15 ば

風に花を散らせるようなことはしなかつただろうに。

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。() ……の左側は口語訳です。

ア やんごとなき人 にはかにいたづきにかかれりけり。たやすからぬ
遊蕩な人 病氣
 様なりければ、今、このくすし一人に任せんもいかがなり、彼もくすしの道には世の常ならねば、これと心を合わせて、葉調せよと言へば、
 ③ 初めのくすし頭ふりて、さらば、その世の常ならぬ者に任せたまへ、
 ④ かかるどみのいたづきを療治せんに、人を語らひてはいかで出て来べきこのよめをな
 ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
 すみやかに怠りぬ。
松平定信著「花月草紙」による。

問1 にはかに とありますが、この部分を「現代仮名遣い」に直し、ひらがなで書きなさい。

[]

問2 世の常ならねば とありますが、この意味として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 人並みなので イ 風変わりなので
 ウ 優れているので エ 常識がないので

問3 これと心を合わせて、葉調せよ とありますが、このように言ったのは、急病にかかった高貴な人の病状がどうであったからですか。それがわかる言葉を本文中から探し、十字以内で書き抜きなさい。

3分

問4 頭ふりて とありますが、これはどのようなことを意味していますか。それを表す熟語として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 拒否 イ 思案
 ウ 感心 エ 承諾

問5 本文中の……線ア～エの中で、同じ人物を表すものが二つあります。どれとどれですか。その記号を書きなさい。

問6 初めに任せてければ とありますが、次は、その理由を説明したものです。空欄A・Bにあてはまる内容を、Aは十字以内、Bは五字以内で書きなさい。また、空欄Cにあてはまる人物を、本文中の……線ア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

急病のときには、

A	B
5	10

ことよりも 治療することのほうが大事だ、という C の言葉に納得したから。

問7 「花月草紙」の書かれた時代を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 奈良時代 イ 平安時代
 ウ 鎌倉時代 エ 江戸時代

ア やんごとなき人「が」急にはか^イにいたづきにかかれりけり。たやすからぬ

高貴な人

病氣

様なりければ、今、このくすし一人に任せんもいかなり、彼もくすしもう一人の医者

の道には世の常ならねば、これと心を合わせて、薬調ぜよと言へば、

初めのくすし④頭③ふりて、さらば、その世の常ならぬ者に任せたまへ、

かかるとみのいたづきを療治せん③に、人を語らひてはいか④で出⑤で来⑥べ

このような急な

人と話し合つてどうしてできようか

きと言ひければ、げ③にもとて初めの④に任せてければ、そのいたづきも

ひるはして

すみやかに怠りぬ。

快復した

（松平定信著「花月草紙」による。）

ア やんごとなき人「が」急ににはか^アにいたづきにかかれりけり。たやすくない(重い)

高貴な人

病氣

イ この医者 いかかなものか(不安だ) 彼もくすしもう一人の医者

世の常(普通)ではないので

① 彼と相談して、

薬を調合しなさい

の道には世の常ならねば、これと心を合わせて、薬調ぜよと言へば、

④ 初めのくすしア頭エふりて、さらば、その世の常ならぬ者に任せたまへ、

かかるアとみのいたづきを療治せんに、人を語らひてはいかエで出ウで来クべ
このようアな急ウな
人と話し合つてどうしてできようか

③ きと言ひければ、げアにもとて初めのウに任せてければ、そのいたづきも
ひるはし

すみやかに怠りぬ。

快復した

まつだいらさだのちか松平定信著「花月草紙」による。

ア やんごとなき人「が」急に「はか」にいたづきにかかれりけり。たやすく(重)い

高貴な人

病氣

イ この医者

いかなものか(不安だ)

ウ

彼もくすし
もう一人の医者

様なりければ、今、このくすし一人に任せんもいかなり、

薬を調合しなさい

世の常(普通)ではないので、^①彼と相談して、
の道には世の常ならねば、これと心を合わせて、薬調せよと言へば、

それならば

エ

初めのくすし^④頭ふりて、さらば、その世の常ならぬ者に任せたまへ、

病気を治療しようというのに

かかるどみのいたづきを療治せんに、人を語らひてはいか^③で出で来^⑤べ
このような急な
人と話し合つてどうしてできようか

きと言ひければ、^③げにもとて初めの^④に任せてければ、そのいたづきも
ひるはして

すみやかに怠りぬ。

快復した

(松平定信著「花月草紙」による。)

ア やんごとなき人 「が」急に にはか^アにいたづきにかかれりけり。 たやすく(重い) たやすからぬ 高貴な人

イ この医者

いかなものか(不安だ)

ウ

様なりければ、今、このくすし一人に任せんもいかながり、彼もくすし もう一人の医者

世の常(普通)ではないので

① 彼と相談して、

薬を調合しなさい

の道には世の常ならねば、これと心を合わせて、薬調ぜよと言へば、

④ それならば

初めのくすし頭ふりて、さらば、その世の常ならぬ者に任せたまへ、

病気を治療しようというのに

かかる^アとみのいたづきを療治せんに、人を語らひてはいか^アで出で来^アべ 人と話し合^アつてどうしてできようか

このように急な

きと言ひければ、げにもとて初めの^アに任せてければ、そのいたづきも なるほど

すみやかに怠りぬ。

まつだいらちゆうめい (松平定信著「花月草紙」による。)

快復した

問1 ① にはかに ② とありますが、この部分を「現代仮名遣い」に直し、

ひらがなで書きなさい。

[]

問2 ② 世の常ならねば とありますが、この意味として最も適切なもの

のを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 人並みなので

イ 風変わりなので

ウ 優れているので

エ 常識がないので

[]

ア やんごとなき人 「が」急に にはか^アにいたづきにかかれりけり。 たやすく(重) たやすくならぬ 高貴な人

様なりければ、今、このくすし イ この医者 一人に任せんもいかなり、 いかなものか(不安だ) 彼もくすし ウ

世の常(普通)ではないので ① 彼と相談して、 薬を調合しなさい

の道には世の常ならねば、これと心を合わせて、薬調ぜよと言へば、

初めのくすし ④ 頭ふりて、さらば、 それならば その世の常ならぬ者に任せたまへ、

病気を治療しようというのに

かかる^アとみのいたづきを療治せんに、 人を語らひてはいか^アで出で来^クべ 人^アと話し合^アつてどうしてできようか

きと言ひければ、 ③ げにもとて初めの^アに任せてければ、そのいたづきも なるほど

すみやかに怠りぬ。

(松平定信著「花月草紙」による。)

問1 ① にはかに ② とありますが、この部分を「現代仮名遣い」に直し、
ひらがなで書きなさい。

「にわか」

問2 ② 世の常ならねば ③ とありますが、この意味として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 人並みなので

イ 風変わりなので

ウ 優れているので

エ 常識がないので

「 」

ア やんごとなき人 「が」急に にはか 病氣 にいたづきにかかれりけり。 たやすくない(重い) たやすからぬ 高貴な人

イ この医者

いかなものか(不安だ)

様なりければ、今、このくすし一人に任せんもいかながり、 もう一人の医者 彼もくすし

世の常(普通)ではないので、

薬を調合しなさい

の道には世の常ならねば、これと心を合わせて、薬調ぜよと言へば、

④ それならば

初めのくすし ④ 頭ふりて、さらば、その世の常ならぬ者に任せたまへ、

病気を治療しようというのに

かかる ③ とみのいたづきを療治せんに、人を語らひてはいか ③ 出で来 ③ べ 人 と話し合つてどうして ③ できようか ③

きと言ひければ、 ③ げにもとて初めの ③ に任せてければ、そのいたづきも ③

すみやかに怠りぬ。

③ (松平定信著「花月草紙」による。)

快復した

問3 ③ これと心を合わせて、薬調ぜよ とありますが、このように言

ったのは、急病にかかった高貴な人の病状がどうであったからですか。それがわかる言葉を本文中から探し、十字以内で書き抜きなさい。

たやすからぬ様なり

ア やんごとなき人 「が」急に にはか^アにいたづきにかかれりけり。 たやすくない(重い) たやすからぬ 高貴な人

イ この医者

いかなものか(不安だ)

ウ

様なりければ、今、このくすし一人に任せんもいかながり、彼もくすし もう一人の医者

世の常(普通)ではないので

①彼と相談して、

薬を調合しなさい

の道には世の常ならねば、これと心を合わせて、薬調ぜよと言へば、

④ それならば

初めのくすし頭ふりて、さらば、その世の常ならぬ者に任せたまへ、

病気を治療しようというのに

かかる^③とみのいたづきを療治せんに、人を語らひてはいか^⑤で出で来^⑥べ

このように急な

人と話し合つてどうしてできようか

きと言ひければ、げにもとて初めの^③に任せてければ、そのいたづきも なるほし

すみやかに怠りぬ。

(松平定信著「花月草紙」による。)

問4 頭ふりて とありますが、これはどのようなことを意味して
いますか。それを表す熟語として最も適切なものを、次のア～エの
中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 拒否

イ 思案

ウ 感心

エ 承諾

〔 〕

ア やんごとなき人 「が」急に にはか 病氣 にいたづきにかかれりけり。 たやすくない(重い) たやすからぬ

イ この医者

いかなものか(不安だ)

ウ

様なりければ、今、このくすし一人に任せんもいかながり、彼もくすし

もう一人の医者

世の常(普通)ではないので

① 彼と相談して、

薬を調合しなさい

の道には世の常ならねば、これと心を合わせて、薬調ぜよと言へば、

④ それならば

初めのくすし頭ふりて、さらば、その世の常ならぬ者に任せたまへ、

病気を治療しようというのに

かかるどみのいたづきを療治せんに、人を語らひてはいか 出で来 べ

このように急な

人と話し合つてどうしてできようか

きと言ひければ、げにもとて初めの ③ に任せてければ、そのいたづきも

なるはし

すみやかに怠りぬ。

快復した

(松平定信著「花月草紙」による。)

問4 頭ふりて とありますが、これはどのようなことを意味して
いますか。それを表す熟語として最も適切なものを、次のア～エの
中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 拒否

イ 思案

ウ 感心

エ 承諾

〔 〕

ア やんごとなき人 「が」急に にはか^アにいたづきにかかれりけり。 たやすくない(重い)
高貴な人

イ この医者

いかなものか(不安だ)

様なりければ、今、このくすし一人に任せんもいかなり、彼もくすし
もう一人の医者

世の常(普通)ではないので、^①彼と相談して、

薬を調合しなさい

の道には世の常ならねば、これと心を合わせて、薬調せよと言へば、

④ それならば

初めのくすし頭ふりて、さらば、その世の常ならぬ者に任せたまへ、

病気を治療しようというのに

かかる^②とみのいたづきを療治せんに、人を語らひてはいか^③で出で来^④べ
人と話し合つてどうしてできようか

このように急な

③ ひるはし

きと言ひければ、げにもとて初めの^⑤に任せてければ、そのいたづきも

すみやかに怠りぬ。

快復した

まつだいらつたけ 松平定信著「花月草紙」による。

問5 本文中の……線ア～エの中で、同じ人物を表すものが二つあります。どれとどれですか。その記号を書きなさい。

⑤

〔 〕〔 〕〔 〕

ア やんごとなき人 「が」急に にはか^アにいたづきにかかれりけり。 たやすくない(重い) たやすからぬ 高貴な人

イ この医者

いかなものか(不安だ)

ウ

様なりければ、今、このくすし一人に任せんもいかなり、彼もくすし もう一人の医者

世の常(普通)ではないので

①彼と相談して、

薬を調合しなさい

の道には世の常ならねば、これと心を合わせて、薬調せよと言へば、

④ それならば

初めのくすし頭ふりて、さらば、その世の常ならぬ者に任せたまへ、

病気を治療しようというのに

かかる^アとみのいたづきを療治せんに、人を語らひてはいか^アで出で来^アべ ひと話し合つてどうしてできようか

このように急な

きと言ひければ、げにもとて初めの^③に任せてければ、そのいたづきも なるはしい

すみやかに怠りぬ。

(松平定信著「花月草紙」による。)

快復した

問5 本文中の……線ア～エの中で、同じ人物を表すものが二つあります。どれとどれですか。その記号を書きなさい。

ア やんごとなき人

イ このくすし

ウ 彼

エ その世の常ならぬ人

ア やんごとなき人 「が」急に にはか^アにいたづきにかかれりけり。 たやすくない(重い) たやすからぬ 高貴な人

イ この医者

いかなものか(不安だ)

様なりければ、今、このくすし一人に任せんもいかなり、 ウ 彼もくすし もう一人の医者

世の常(普通)ではないので

① 彼と相談して、

薬を調合しなさい

の道には世の常ならねば、これと心を合わせて、薬調ぜよと言へば、

④ それならば

初めのくすし エ 頭ふりて、さらば、その世の常ならぬ者に任せたまへ、

病気を治療しようというのに

かかる^③とみのいたづきを療治せんに、 人を語らひてはいか 出で来^クべ 人と話し合つてどうしてできようか

きと言ひければ、 ③ げにもとて初めの^③に任せてければ、そのいたづきも ひるはし

すみやかに怠りぬ。

(松平定信著「花月草紙」による。)

快復した

問5 本文中の……線ア～エの中で、同じ人物を表すものが二つあります。どれとどれですか。その記号を書きなさい。

ア やんごとなき人 急に病気になった

イ このくすし 最初に任された医者

ウ 彼 もう一人の医者

エ その世の常ならぬ人

ア やんごとなき人 「が」急に にはか^アにいたづきにかかれりけり。 たやすくない(重い) たやすからぬ 高貴な人

イ この医者

いかなものか(不安だ)

ウ

様なりければ、今、このくすし一人に任せんもいかなり、彼もくすし もう一人の医者

世の常(普通)ではないので、

①彼と相談して、

薬を調合しなさい

の道には世の常ならねば、これと心を合わせて、薬調ぜよと言へば、

それならば

エ

初めのくすし頭ふりて、さらば、その世の常ならぬ者に任せたまへ、

病気を治療しようというのに

かかる^キとみのいたづきを療治せんに、人を語らひてはいか^カで出で来^クべ 人と話し合つてどうしてできようか

このように急な

③ ひるはし ^キと言ひければ、^カげにもとて初めの^カに任せてければ、そのいたづきも

すみやかに怠りぬ。

快復した

まつだいちゅうめい (松平定信著「花月草紙」による。)

問5 本文中の……線ア～エの中で、同じ人物を表すものが二つあります。どれとどれですか。その記号を書きなさい。

ア やんごとなき人

急に病気になった

イ このくすし

最初に任された医者

ウ 彼

もう一人の医者

エ その世の常ならぬ人

ア やんごとなき人 「が」急に にはか 病氣 にいたづきにかかれりけり。たやすからぬ たやすくない(重い)

様なりければ、今、このくすし イ この医者 一人に任せんもいかなり、彼もくすし ウ いか いかなものか(不安だ) がなもので、

世の常(普通)ではないので、① 彼と相談して、薬を調合しなさい

の道には世の常ならねば、これと心を合わせて、薬調ぜよと言へば、

初めのくすし ② 頭ふりて、それならば さらば、その世の常ならぬ者に任せたまへ、

病気を治療しようというのに

かかるとみのいたづきを療治せんに、人を語らひてはいか ③ 出で来 人を語り合つてどうしてできようか べ

きと言ひければ、④ げにもとて初めの ひるはし に任せてければ、そのいたづきも

すみやかに怠りぬ。

(松平定信著「花月草紙」による。)

問5 本文中の……線ア～エの中で、同じ人物を表すものが二つあります。どれとどれですか。その記号を書きなさい。

ア やんごとなき人 急に病気になった

イ このくすし 最初に任された医者

ウ 彼 もう一人の医者

エ その世の常ならぬ人 彼(もう一人の医者)

ア やんごとなき人 「が」急に にはかいたづきにかかれりけり。たやすからぬ たやすくない(重い)

イ この医者

いかなものか(不安だ)

様なりければ、今、このくすし一人に任せんもいかながり、彼もくすし もう一人の医者

世の常(普通)ではないので ①彼と相談して、

薬を調合しなさい

の道には世の常ならねば、これと心を合わせて、薬調ぜよと言へば、

初めのくすし

②頭ふりて、さらば、それなら(げ)

その世の常ならぬ者に任せたまへ、

病気を治療しようというのに

かかるとみのいたづきを療治せんに、人を語らひてはいか出で来べ 人と話し合つてどうしてできようか

このように急な

③きと言ひければ、げにもとて初めの^③に任せてければ、そのいたづきも ひるはして

すみやかに怠りぬ。 快復した

(松平定信著「花月草紙」による。)

- 問6 ⑤ 初めの^⑤に任せてければ とありますが、次は、その理由を説明したものです。空欄A・Bにあてはまる内容を、Aは十字以内、Bは五字以内で書きなさい。また、空欄Cにあてはまる人物を、本文中の~~~~線ア〜エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

急病のとき^⑤は、

A
10

ことよりも

B
5

治療することのほうが大事

だ、という

C

の言葉に納得したから。

ア やんごとなき人 「が」急に にはか 病氣 にいたづきにかかれりけり。たやすからぬ たやすくない(重い)

様なりければ、今、このくすし イ この医者 一人に任せんもいかながり、彼もくすし ウ

世の常(普通)ではないので ①彼と相談して、薬を調合しなさい もう一人の医者

の道には世の常ならねば、これと心を合わせて、薬調ぜよと言へば、

初めのくすし ② 頭ふりて、さらば、その世の常ならぬ者に任せたまへ、
それならび エ

病気を治療しようというのに

かかる このように急な とみのいたづきを療治せんに、人を語らひてはいか 人 で出で来べ 人と話し合つてどうしてできようか

き ③ と言ひければ、げにもとて初めの ひるはし に任せてければ、そのいたづきも

すみやかに怠りぬ。
快復した

松平定信著「花月草紙」による。

- 問6 ⑤ 初めの⑤に任せてければ ⑤とありますが、次は、その理由を説明したものです。空欄A・Bにあてはまる内容を、Aは十字以内、Bは五字以内で書きなさい。また、空欄Cにあてはまる人物を、本文中の~~~~線ア〜エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

急病のとき①は、A **人と話し合おう**

ことよりもB **話し合わず** 治療することのほうが大事

だ、というC の言葉に納得したから。

ア やんごとなき人 「が」急に にはか 病氣 にいたづきにかかれりけり。 たやすくない(重い) たやすからぬ 高貴な人

様なりければ、今、このくすし イ この医者 一人に任せんもいかながり、 ウ 彼もくすし いかななものか(不安だ)

世の常(普通)ではないので、 彼と相談して、 薬を調合しなさい もう一人の医者

の道には世の常ならねば、これと心を合わせて、薬調ぜよと言へば、

初めのくすし それなら(げ) 頭ふりて、さらば、その世の常ならぬ者に任せたまへ、

かかる 病気を治療しようというのに とみのいたづきを療治せんに、 人を語らひてはいか 出で来べ 人と話し合つてどうしてできようか

きと言ひければ、 むるは(し) げにもとて初めの ③ に任せてければ、そのいたづきも

すみやかに怠りぬ。 快復した (松平定信著「花月草紙」による。)

問6 ⑤ 初めの⑤に任せてければ ⑤とありますが、次は、その理由を説明したものです。空欄A・Bにあてはまる内容を、Aは十字以内、Bは五字以内で書きなさい。また、空欄Cにあてはまる人物を、本文中の~~~~線ア〜エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

急病のときには、

A	人と話し合(あ)ひ	10
B	すぐ	5
C	治療することのほうが大事だ、という	

急病のときには、A人と話し合(あ)ひ、Bすぐ、C治療することのほうが大事だ、というCの言葉に納得したから。

ア やんごとなき人 「が」急に にはかいたづきにかかれりけり。 たやすくない(重い)
高貴な人

様なりければ、今、このくすし イ この医者 一人に任せんもいかなり、 ウ いかかなものか(不安だ) 彼もくすし もう一人の医者

の道には世の常ならねば、これと心を合わせて、薬調ぜよと言へば、 薬を調合しなさい

初めのくすし ① 頭ふりて、 それならび さらば、その世の常ならぬ者に任せたまへ、

かかるどみのいたづきを療治せんに、 病気を治療しようというのに 人を語らひてはいか 人 で出で来べ 人と話し合つてどうしてできようか

きと言ひければ、 ひるはし げにもとて初めの ③ に任せてければ、そのいたづきも

すみやかに怠りぬ。 快復した
(松平定信著「花月草紙」による。)

問6 ⑤ 初めの ⑤ に任せてければ とありますが、次は、その理由を説明したものです。空欄A・Bにあてはまる内容を、Aは十字以内、Bは五字以内で書きなさい。また、空欄Cにあてはまる人物を、本文中の~~~~線ア〜エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

急病のときは、

急病のときは、	A	人	と	話	し	合	う	口	づ
ことよりも	B	す	ぐ	に	い				
だ、という	C	の	言	葉	に	納	得	し	た

治療することのほうが大事

5

10

ア やんごとなき人「が」急ににはか「が」急ににいたづきにかかれりけり。たやすたやすくないからぬ

様なりければ、今、このくすしこの医者一人に任せんもいかないかなものか不安だなり、彼もくすし

世の常世の常普通ではないので、彼と相談して、薬を調合もう一人の医者しなさい

の道には世の常ならねば、これと心を合わせて、薬調ぜよと言へば、

初めのくすしそれなら頭ふりて、さらば、その世の常ならぬ者に任せたまへ、

かかる病気を治療しようというのにとみのいたづきを療治せんに、人を語らひてはいか人で出で来べ

きと言ひければ、げにもとて初めのひるはしに任せてければ、そのいたづきも

すみやかに怠りぬ。
（松平定信著「花月草紙」による。）

問6 ⑤ 初めの⑤に任せてければ とありますが、次は、その理由を説明したものです。空欄A・Bにあてはまる内容を、Aは十字以内、Bは五字以内で書きなさい。また、空欄Cにあてはまる人物を、本文中の線ア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

急病のときは、

急病のときは、	A	人と話し合おう
ことよりも	B	すぐ
だ、という	C	治療することのほうが大事

治療することのほうが大事だ、というCの言葉に納得したから。

ア やんごとなき人「が」急ににはか病氣にいたづきにかかれりけり。たやすたやすくないからぬ

イ この医者

いかなものか(不安だ)

様なりければ、今、このくすし一人に任せんもいかなり、彼もくすし

もう一人の医者

世の常(普通)ではないので、彼と相談して、

薬を調合しなさい

の道には世の常ならねば、これと心を合わせて、薬調せよと言へば、

初めのくすしそれならば頭ふりて、さらば、その世の常ならぬ者に任せたまへ、

病気を治療しようというのに

かかるこのように急なとみのいたづきを療治せんに、人を語らひてはいか人と話し合つてどうしてできようかで出で来べ

きと言ひければ、げにもとて初めのなるほどに任せてければ、そのいたづきも

すみやかに怠りぬ。

(松平定信著「花月草紙」による。)

問7 「花月草紙」の書かれた時代を、次のア～エの中から一つ選び、

その記号を書きなさい。

ア 奈良時代

イ 平安時代

ウ 鎌倉時代

エ 江戸時代

〔 〕

ア やんごとなき人「が」急ににはかいたづきにかかれりけり。たやすからぬたやすくない(重い)

イ この医者

いかなものか(不安だ)

様なりければ、今、このくすし一人に任せんもいかなり、彼もくすし

もう一人の医者

世の常(普通)ではないので、彼と相談して、

薬を調合しなさい

の道には世の常ならねば、これと心を合わせて、薬調せよと言へば、

初めのくすし

それならば

その世の常ならぬ者に任せたまへ、

病気を治療しようというのに

かかるとみのいたづきを療治せんに、人を語らひてはいかで出で来べ

人と話し合つてどうしてできようか

きと言ひければ、げにもとて初めの③に任せてければ、そのいたづきも

なるほど

すみやかに怠りぬ。

快復した

松平定信著

「花月草紙」による。

問7 「花月草紙」の書かれた時代を、次のア～エの中から一つ選び、

その記号を書きなさい。

ア 奈良時代

イ 平安時代

ウ 鎌倉時代

エ 江戸時代

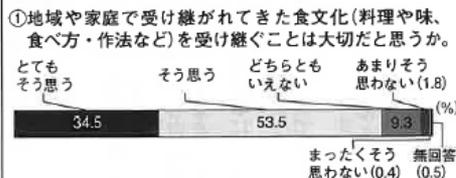
〔 〕

◇出題パターン

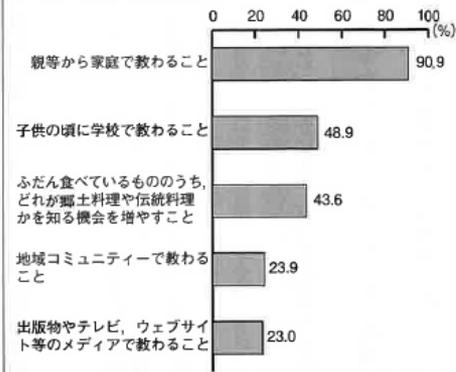
次の資料は、農林水産省が行った「食育に関する意識調査」の結果をまとめたものです。

国語の授業で、この資料から読み取ったことをもとに「食文化を受け継いでいくために何をしようか」というかについて、一人一人が自分の考えを文章にまとめることにしました。あとの(注意)に従って、あなたの考えを書きなさい。

資料



②食文化を受け継ぐために必要だと思うこと 上位5項目 (複数回答)



農林水産省 令和4年度「食育に関する意識調査」より作成

(注意)

- (1) 二段落構成とし、第一段落では、あなたが資料から読み取った内容を、第二段落では、第一段落の内容に関連させて、自分の体験(見たこと聞いたことなども含む)をふまえてあなたの考えを書くこと。
- (2) 文章は、十一行以上、十三行以内で書くこと。
- (3) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。
- (4) 題名・氏名は書かないで、一行目から本文を書くこと。

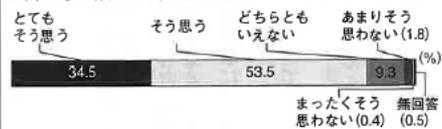
◇出題パターン

次の資料は、農林水産省が行った「食育に関する意識調査」の結果をまとめたものです。

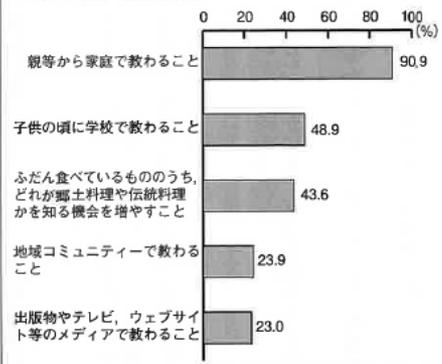
国語の授業で、この資料から読み取ったことをもとに「食文化を受け継いでいくために何をしたいかと思うか」について、一人一人が自分の考えを文章にまとめることにしました。あとの(注意)に従って、あなたの考えを書きなさい。

資料

①地域や家庭で受け継がれてきた食文化(料理や味、食べ方・作法など)を受け継ぐことは大切だと思うか。



②食文化を受け継ぐために必要だと思うこと上位5項目(複数回答)



農林水産省 令和4年度「食育に関する意識調査」より作成

★(作文最速テクニック) ★作文の型にはめる

(注意)

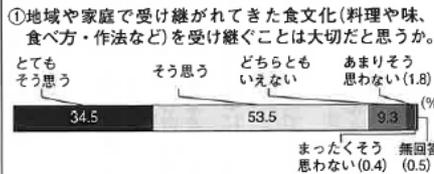
- (1) 二段落構成とし、第一段落では、あなたが資料から読み取った内容を、第二段落では、第一段落の内容に関連させて、自分の体験(見たこと聞いたことなども含む)をふまえてあなたの考えを書くこと。
- (2) 文章は、十一行以上、十三行以内で書くこと。
- (3) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。
- (4) 題名・氏名は書かないで、一行目から本文を書くこと。

◇出題パターン

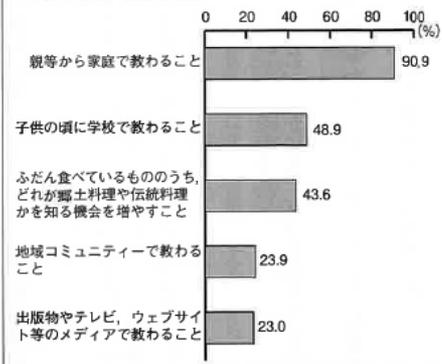
次の資料は、農林水産省が行った「食育に関する意識調査」の結果をまとめたものです。

国語の授業で、この資料から読み取ったことをもとに「食文化を受け継いでいくために何をしたいかと思うか」について、一人一人が自分の考えを文章にまとめることにしました。あとの(注意)に従って、あなたの考えを書きなさい。

資料



②食文化を受け継ぐために必要だと思うこと上位5項目(複数回答)



農林水産省 令和4年度「食育に関する意識調査」より作成

(注意)

- (1) **二段落構成とし**、**第一段落では**、あなたが資料から読み取った内容を、第二段落では、第一段落の内容に関連させて、自分の体験(見たこと聞いたことなども含む)をふまえてあなたの考えを書くこと。
- (2) 文章は、十一行以上、十三行以内で書くこと。
- (3) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。
- (4) 題名・氏名は書かないで、一行目から本文を書くこと。

(作文最速テクニク)

★作文の型にはめる

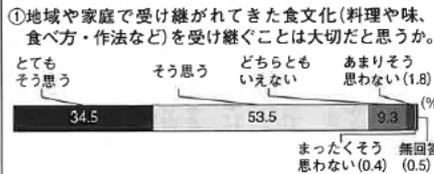
(第一段落) 私はこの資料から() () を読み取った。

◇出題パターン

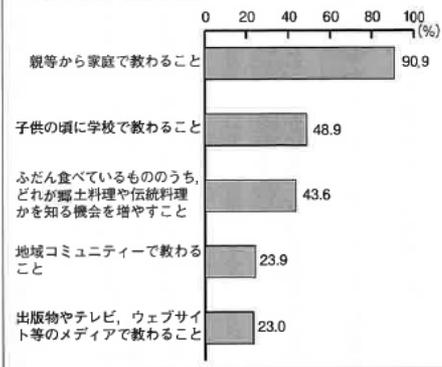
次の資料は、農林水産省が行った「食育に関する意識調査」の結果をまとめたものです。

国語の授業で、この資料から読み取ったことをもとに「食文化を受け継いでいくために何をしたいかと思うか」について、一人一人が自分の考えを文章にまとめることにしました。あとの(注意)に従って、あなたの考えを書きなさい。

資料



②食文化を受け継ぐために必要だと思うこと上位5項目(複数回答)



農林水産省 令和4年度「食育に関する意識調査」より作成

(注意)

- (1) **二段落構成とし、第一段落では、あなたが資料から読み取った内容を、第二段落では、第一段落の内容に関連させて、自分の体験(見たこと聞いたことなども含む)をふまえてあなたの考えを書くこと。**
- (2) 文章は、十一行以上、十三行以内で書くこと。
- (3) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。
- (4) 題名・氏名は書かないで、一行目から本文を書くこと。

(作文最速テクニク)

★作文の型にはめる

(第一段落) 私はこの資料から () を読み取った。

聞いた。見た。

(第二段落) 先日、私は () をした。経験した。

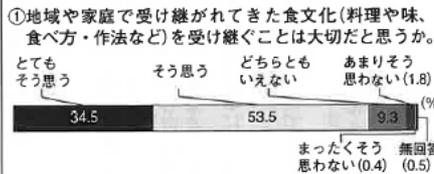
したことがある。

◇出題パターン

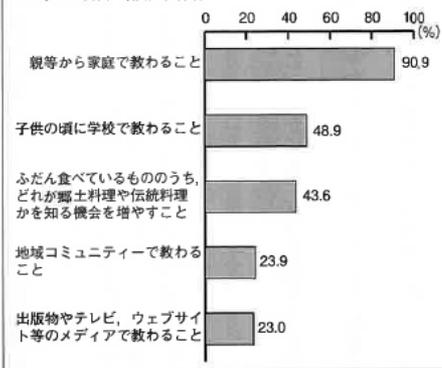
次の資料は、農林水産省が行った「食育に関する意識調査」の結果をまとめたものです。

国語の授業で、この資料から読み取ったことをもとに「食文化を受け継いでいくために何をしたいかと思うか」について、一人一人が自分の考えを文章にまとめることにしました。あとの(注意)に従って、あなたの考えを書きなさい。

資料



②食文化を受け継ぐために必要だと思うこと上位5項目(複数回答)



農林水産省 令和4年度「食育に関する意識調査」より作成

(作文最速テクニク)

★作文の型にはめる

(第一段落) 私はこの資料から () を読み取った。

聞いた。見た。

(第二段落) 先日、私は () をした。経験した。

したことがある。

そのときに、私は () 気づいた。

(注意)

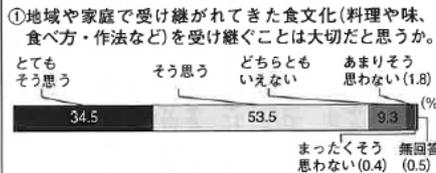
- (1) **二段落構成とし、第一段落では、あなたが資料から読み取った内容を、第二段落では、第一段落の内容に関連させて、自分の体験(見たこと聞いたことなども含む)をふまえてあなたの考えを書くこと。**
- (2) 文章は、十一行以上、十三行以内で書くこと。
- (3) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。
- (4) 題名・氏名は書かないで、一行目から本文を書くこと。

◇出題パターン

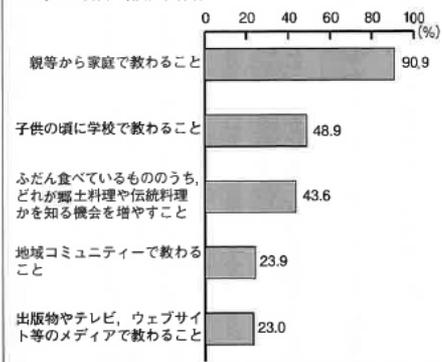
次の資料は、農林水産省が行った「食育に関する意識調査」の結果をまとめたものです。

国語の授業で、この資料から読み取ったことをもとに「食文化を受け継いでいくために何をしたいかと思うか」について、一人一人が自分の考えを文章にまとめることにしました。あとの(注意)に従って、あなたの考えを書きなさい。

資料



②食文化を受け継ぐために必要だと思うこと上位5項目 (複数回答)



農林水産省 令和4年度「食育に関する意識調査」より作成

(作文最速テクニク)

★作文の型にはめる

(第一段落) 私はこの資料から () を読み取った。

聞いた。見た。

(第二段落) 先日、私は () をした。経験した。

したことがある。

そのときに、私は () 気づいた。

(注意)

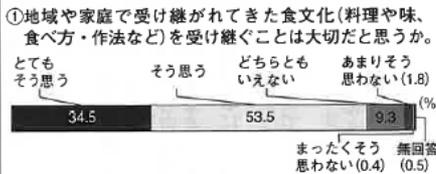
- (1) 二段落構成とし、第一段落では、あなたが資料から読み取った内容を、第二段落では、第一段落の内容に関連させて、自分の体験(見たこと聞いたことなども含む)をふまえてあなたの考えを書くこと。
- (2) 文章は、十一行以上、十三行以内で書くこと。
- (3) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。
- (4) 題名・氏名は書かないで、一行目から本文を書くこと。

◇出題パターン

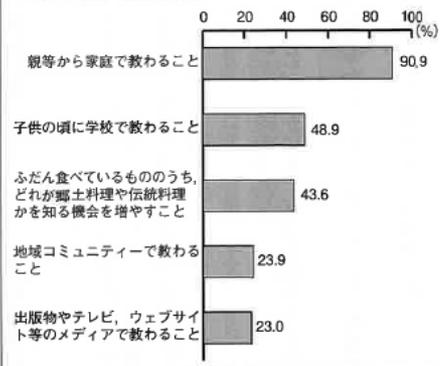
次の資料は、農林水産省が行った「食育に関する意識調査」の結果をまとめたものです。

国語の授業で、この資料から読み取ったことをもとに「食文化を受け継いでいくために何をしたいかと思うか」について、一人一人が自分の考えを文章にまとめることにしました。あとの(注意)に従って、あなたの考えを書きなさい。

資料



②食文化を受け継ぐために必要だと思うこと上位5項目(複数回答)



農林水産省 令和4年度「食育に関する意識調査」より作成

(作文最速テクニク)

★作文の型にはめる

(第一段落) 私はこの資料から () を読み取った。

聞いた。見た。

(第二段落) 先日、私は () をした。経験した。

したことがある。

そのときに、私は () 気づいた。

したがって、(テーマに対する自分の考え)

(注意)

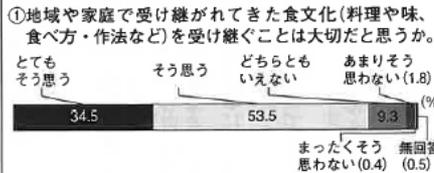
- (1) **二段落構成とし、第一段落では、あなたが資料から読み取った内容を、第二段落では、第一段落の内容に関連させて、自分の体験(見たこと聞いたことなども含む)をふまえてあなたの考えを書くこと。**
- (2) 文章は、十一行以上、十三行以内で書くこと。
- (3) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。
- (4) 題名・氏名は書かないで、一行目から本文を書くこと。

◇出題パターン

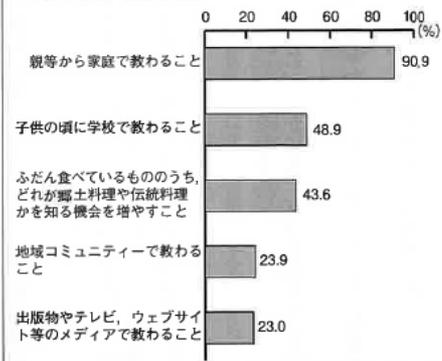
次の資料は、農林水産省が行った「食育に関する意識調査」の結果をまとめたものです。

国語の授業で、この資料から読み取ったことをもとに「食文化を受け継いでいくために何をしたいかと思うか」について、一人一人が自分の考えを文章にまとめることにしました。あとの(注意)に従って、あなたの考えを書きなさい。

資料



②食文化を受け継ぐために必要だと思うこと上位5項目(複数回答)



農林水産省 令和4年度「食育に関する意識調査」より作成

(注意)

- (1) **二段落構成とし、**第一段落では、あなたが資料から読み取った内容を、第二段落では、第一段落の内容に関連させて、自分の体験(見たこと聞いたことなども含む)をふまえてあなたの考えを書くこと。
- (2) 文章は、十一行以上、十三行以内で書くこと。
- (3) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。
- (4) 題名・氏名は書かないで、一行目から本文を書くこと。

(作文最速テクニク)

★作文の型にはめる

(第一段落) 私はこの資料から () を読み取った。

聞いた。見た。

(第二段落) 先日、私は () をした。経験した。

したことがある。

そのときに、私は () 気づいた。

したがって、(テーマに対する自分の考え) 私は食文化を受け継いでいくために () をしたいと思う。

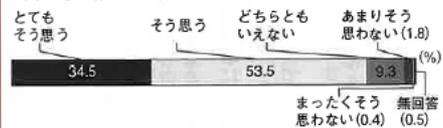
◇出題パターン

次の資料は、農林水産省が行った「食育に関する意識調査」の結果をまとめたものです。

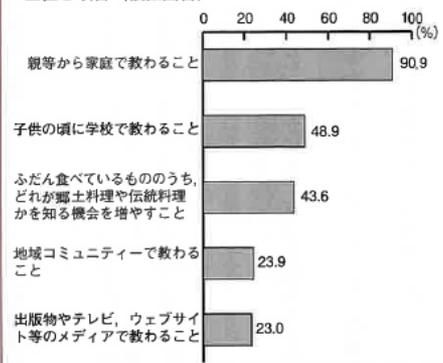
国語の授業で、この資料から読み取ったことをもとに「食文化を受け継いでいくために何をしたいかと思うか」について、一人一人が自分の考えを文章にまとめることにしました。あとの(注意)に従って、あなたの考えを書きなさい。

資料

①地域や家庭で受け継がれてきた食文化(料理や味、食べ方・作法など)を受け継ぐことは大切だと思うか。



②食文化を受け継ぐために必要だと思うこと上位5項目(複数回答)



農林水産省 令和4年度「食育に関する意識調査」より作成

私は、この資料から、食文化を受け継ぐことは大切で、それを家庭で教わる必要だと思っている人が多いことを読み取った。

先日、私はテレビで家庭でおせち料理をあまり作らなくなったことを知った。おせちを作るのは負担大きいが、新年を祝い、家族の幸福を願う意味があり残したい風習である。食文化の意味を知ることがはできる。したがって、私は食

文化を受け継いでいくために食文化を知る機会を増やしていきたい。

(注意)

- 二段落構成とし、第一段落では、あなたが資料から読み取った内容を、第二段落では、第一段落の内容に関連させて、自分の体験(見たこと聞いたことなども含む)をふまえてあなたの考えを書くこと。
- 文章は、十一行以上、十三行以内で書くこと。
- 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。
- 題名・氏名は書かないで、一行目から本文を書くこと。

1 次の資料は、文化庁が行った「国語に関する世論調査」の結果をまとめたものです。

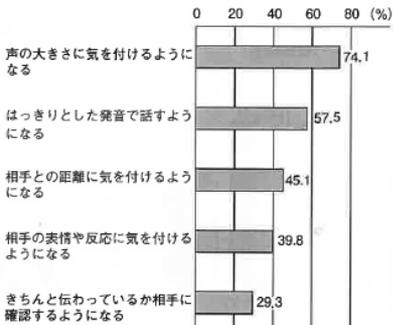
国語の授業で、この資料から読み取ったことをもとに「マスクを着けて会話をするときに気を付けること」について、一人一人が自分の考えを文章にまとめることにしました。あとの(注意)に従って、あなたの考えを書きなさい。

資料

①マスクを着けると話し方や態度などが変わることがあると思うか。



②マスクを着けると変わることがあると思う点
上位5項目 (複数回答)



文化庁 令和2年度「国語に関する世論調査」より作成

(注意)

- (1) 二段落構成とし、第一段落では、あなたが資料から読み取った内容を、第二段落では、第一段落の内容に関連させて、自分の体験(見たこと聞いたことなども含む)をふまえてあなたの考えを書くこと。
- (2) 文章は、十一行以上、十三行以内で書くこと。
- (3) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。
- (4) 題名・氏名は書かないで、一行目から本文を書くこと。

1 次の資料は、文化庁が行った「国語に関する世論調査」の結果をまとめたものです。

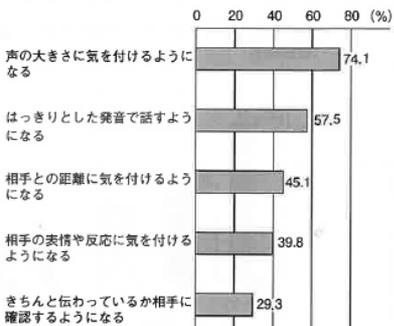
国語の授業で、この資料から読み取ったことをもとに「マスクを着けて会話をするときに気を付けること」について、一人一人が自分の考えを文章にまとめることにしました。あとの(注意)に従って、あなたの考えを書きなさい。

資料

①マスクを着けると話し方や態度などが変わることがあると思うか。



②マスクを着けると変わることがあると思う点
上位5項目 (複数回答)



文化庁 令和2年度「国語に関する世論調査」より作成

(注意)

- (1) 二段落構成とし、第一段落では、あなたが資料から読み取った内容を、第二段落では、第一段落の内容に関連させて、自分の体験(見たこと聞いたことなども含む)をふまえてあなたの考えを書くこと。
- (2) 文章は、十一行以上、十三行以内で書くこと。
- (3) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。
- (4) 題名・氏名は書かないで、一行目から本文を書くこと。

1 次の資料は、文化庁が行った「国語に関する世論調査」の結果をまとめたものです。

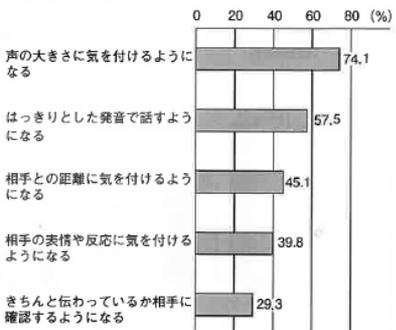
国語の授業で、この資料から読み取ったことをもとに「マスクを着けて会話をするときに気を付けること」について、一人一人が自分の考えを文章にまとめることにしました。あとの(注意)に従って、あなたの考えを書きなさい。

資料

①マスクを着けると話し方や態度などが変わることがあると思うか。



②マスクを着けると変わることがあると思う点
上位5項目 (複数回答)



文化庁 令和2年度「国語に関する世論調査」より作成

(注意)

- (1) 二段落構成とし、第一段落では、あなたが資料から読み取った内容を、第二段落では、第一段落の内容に関連させて、自分の体験(見たこと聞いたことなども含む)をふまえてあなたの考えを書くこと。
- (2) 文章は、十一行以上、十三行以内で書くこと。
- (3) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。
- (4) 題名・氏名は書かないで、一行目から本文を書くこと。

私は、この資料から、()
()ことを読み取った。

先日、私は ()

()。

したがって、私は、マスクを着けて
会話するときには ()
気をつけたい。

1 次の資料は、文化庁が行った「国語に関する世論調査」の結果をまとめたものです。

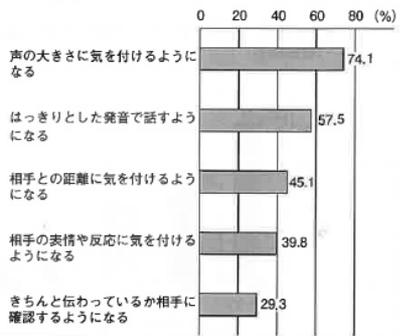
国語の授業で、この資料から読み取ったことをもとに「マスクを着けて会話をするときに気を付けること」について、一人一人が自分の考えを文章にまとめることにしました。あとの(注意)に従って、あなたの考えを書きなさい。

資料

①マスクを着けると話し方や態度などが変わることがあると思うか。



②マスクを着けると変わることがあると思う点
上位5項目 (複数回答)



文化庁 令和2年度「国語に関する世論調査」より作成

(注意)

- (1) 二段落構成とし、第一段落では、あなたが資料から読み取った内容を、第二段落では、第一段落の内容に関連させて、自分の体験見聞したこと聞いたことなども含むをふまえてあなたの考えを書くこと。
- (2) 文章は、十一行以上、十三行以内で書くこと。
- (3) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。
- (4) 題名・氏名は書かないで、一行目から本文を書くこと。

私は、この資料から、マスクを着けると話し方や態度などが変わり、声の大きさに気を付けるようになる」と答えた人が多いことを読み取った。

先日、私は授業で先生に指名されて答えたときに、先生によく聞こえないと指摘された。マスクをつけて普段と同じ大きさの声で話したことが原因だった。したがって、私は、マスクを着けて会話するときには普段より大きな声で話すように気をつけたい。

国語宿題

1. 文学的文章② . . . P36~P37

2. 古文② . . . P58~P59

3. 作文 . . . P62 2